

鹿児島工業高等専門学校				電気情報システム工学専攻				開講年度		平成29年度 (2017年度)					
学科到達目標															
科目区分		授業科目	科目番号	単位種別	単位数	学年別週当授業時数								担当教員	履修上の区分
						専1年				専2年					
						前		後		前		後			
						1Q	2Q	3Q	4Q	1Q	2Q	3Q	4Q		
一般	必修	総合英語	0025	学修単位	2	2								塚崎 香織	
一般	選択	科学技術英語	0026	学修単位	2			2						坂元 真理子	
一般	選択	現代企業法論	0027	学修単位	2			2						松田 忠大	
一般	選択	国際関係論	0028	学修単位	2	2								藤内 哲也	
専門	必修	特別研究 I	0001	履修単位	4	4		4						逆瀬川 栄一	
専門	必修	特別セミナー	0002	学修単位	2	1		1						櫻根 健史	
専門	選択	電磁気学特論	0003	学修単位	2	2								玉利 陽三	
専門	選択	応用電子物性	0004	学修単位	2			2						濱川 恭央	
専門	選択	電力システム解析	0005	学修単位	2	2								中村 格	
専門	選択	電子回路解析	0006	学修単位	2			2						寺師 裕人	
専門	選択	ニューラルネットワーク	0007	学修単位	2	2								濱川 恭央	
専門	選択	画像処理基礎	0008	学修単位	2			2						前園 正宜	
専門	選択	電気電子工学特別演習	0009	学修単位	1	1								今村 成明	
専門	選択	情報工学特別演習	0010	学修単位	1			1						幸田 晃之, 浩二郎, 原 崇	
専門	選択	特別実習A(4週間)	0011	履修単位	4	集中講義								逆瀬川 栄一	
専門	選択	特別実習B(2週間)	0012	履修単位	2	集中講義								逆瀬川 栄一	
専門	選択	電気情報システム工学特別講義 I	0013	学修単位	1			1						逆瀬川 栄一	
専門	必修	環境プロセス工学	0014	学修単位	2			2						大竹 孝明	
専門	必修	環境科学	0015	学修単位	2			2						山田 真義	
専門	必修	環境創造工学プロジェクト	0016	学修単位	2	1		1						入江 智和, 徳永 仁夫, 櫻根 健史, 吉満 真一, 西留 清, 山田 真義	
専門	選択	微分方程式	0017	学修単位	2	2								熊谷 博	
専門	選択	ベクトル解析	0018	学修単位	2			2						松浦 將國	
専門	選択	線形代数学	0019	学修単位	2	2								嶋根 紀仁	
専門	選択	地球物理学概論	0020	学修単位	2			2						池田 昭大	
専門	選択	デジタル信号概論	0021	学修単位	2			2						河野 良弘	
専門	選択	応用電子計測	0022	学修単位	2			2						寺師 裕人	
専門	選択	技術と社会のかかわり	0023	学修単位	2	2								須田 隆夫, 保坂 直之, 坂元 真理子, 戸 健一, 玉利 陽三	

専門	選択	環境創造工学特別講義	0024	学修単位	1	1	逆瀬川 栄一 吉満 眞一 山田 眞義	
一般	必修	技術倫理	0042	学修単位	2	2	町 泰樹	
一般	選択	論理的英語コミュニケーション	0043	学修単位	2	2	坂元 眞理子	
専門	必修	特別研究Ⅱ	0026	履修単位	10	10 10	逆瀬川 栄一	
専門	選択	集積回路製造技術	0027	学修単位	2	2	須田 隆夫	
専門	選択	音響システム工学	0028	学修単位	2	2	幸田 晃	
専門	選択	回路工学特論	0029	学修単位	2	2	芝 浩二郎	
専門	選択	ネットワークアーキテクチャ	0030	学修単位	2	2	入江 智和	
専門	選択	電気情報システム工学特別講義Ⅱ	0031	学修単位	1	1	逆瀬川 栄一	
専門	必修	環境電磁気学	0032	学修単位	2	2	鎌田 清孝	
専門	必修	環境人間工学	0033	学修単位	2	2	山田 眞義	
専門	選択	応用代数学	0034	学修単位	2	2	白坂 繁	
専門	選択	解析力学	0035	学修単位	2	2	篠原 学	
専門	選択	量子力学	0036	学修単位	2	2	野澤 宏太	
専門	選択	知的生産システム	0037	学修単位	2	2	塚本 公秀	
専門	選択	精密加工学	0038	学修単位	2	2	大淵 慶史	
専門	選択	安全衛生工学	0039	学修単位	2	2	寄村 和広	
専門	選択	超伝導工学	0040	学修単位	2	2	奥 高洋	
専門	選択	ヒューマンインターフェース	0041	学修単位	2	2	新徳 健	

鹿児島工業高等専門学校		開講年度	平成29年度 (2017年度)		授業科目	総合英語	
科目基礎情報							
科目番号	0025			科目区分	一般 / 必修		
授業形態	講義			単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	電気情報システム工学専攻			対象学年	専1		
開設期	前期			週時間数	2		
教科書/教材	新TOEIC TEST英文法出るとこだけ！・新TOEIC TESTリスニング出るとこだけ！						
担当教員	塚崎 香織						
到達目標							
1. 毎分120語程度の速度で物語文や説明文などを読み、その内容を要約できる。 2. 相手が明瞭に毎分120語程度の速度で、自分や身近なこと及び自分の専門に関する簡単な情報や考えを話す場合、その内容を聞いて要約できる。							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安			標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1	読んだ内容について、その情報や考えを、過不足なく全て要約できる。			読んだ内容について、その情報や考えを、概ね要約できる。		読んだ内容について、その情報や考えを、要約できない。	
評価項目2	聞いた内容について、その情報や考えを、過不足なく全て要約できる。			聞いた内容について、その情報や考えを、概ね要約できる。		聞いた内容について、その情報や考えを、要約できない。	
評価項目3							
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	実用英語能力の向上を目指し、一例としてTOEIC400点を突破できる英語学力を総合的に養う。TOEIC関連のリスニング、および語彙力、構文、読解等の学習強化をはかる。TOEIC400点以上相当の英語力を養うための総合学習コース。本科で習得した英語（語彙・文法・読解・リスニング等）の復習および発展・強化を主軸とする。						
授業の進め方・方法	毎回、語彙や文法の小テストを行う。常に積極的な態度で自学し、課題に取り組むこと。その他、各自の必要性に応じて、語彙力・文法力・読解力・リスニング力強化のため、日々英語学習に励むこと。						
注意点	〔外部試験(30%)＋定期試験成績(60%)＋小テスト(10%)〕－平常点(上限10%)。 なお、外部試験はTOEIC試験400点、TOEIC IP試験400点、実用英検準2級以上あるいは工業英検3級以上の取得者のみ評価の対象とする。（注：TOEIC試験またはTOEIC IP試験400点未満は0点とする。又、実用英検準2級以上あるいは工業英検3級以上を取得していなければ、0点とする。）ただし、TOEIC試験またはTOEIC IP試験の有効期限については、本科目受講前年度および前々年度の過去2年間である。実用英検または工業英検については有効期限はないものとする。						
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
前期	1stQ	1週	語彙（単語・熟語・慣用表現）		国際的なコミュニケーションの場面で用いられる単語・熟語・慣用表現を身につける。		
		2週	語彙（単語・熟語・慣用表現）		国際的なコミュニケーションの場面で用いられる単語・熟語・慣用表現を身につける。		
		3週	語法（品詞）		品詞を理解し、正しい品詞を選択することができる。		
		4週	語法（冠詞）		冠詞を理解し、正しい冠詞を選択することができる。		
		5週	語法（代名詞）		代名詞を理解し、代名詞を選択することができる。		
		6週	語法（動詞の形）		主語と動詞の対応（数の一致など）を理解し、動詞を正しい形にできる。また、現在分詞と過去分詞の用法を理解し、使い分けることができる。		
		7週	語法（動詞の形）		主語と動詞の対応（数の一致など）を理解し、動詞を正しい形にできる。また、現在分詞と過去分詞の用法を理解し、使い分けることができる。		
		8週	語法（時制）		時制を理解し、正しい時制を選択することができる。		
	2ndQ	9週	語法（仮定法）		仮定法の用法や慣用表現を理解し、文を作ることができる。		
		10週	語法（接続詞）		各接続詞の特徴を理解し、正しい接続詞を選択することができる。		
		11週	語法（関係詞）		関係代名詞、関係副詞の種類や用法を理解し、正しい関係詞を選択することができる。		
		12週	語法（比較級）		比較の用法や慣用表現を理解し、文を作ることができる。		
		13週	読むこと・聞くこと		毎分120語程度の速度で物語文や説明文などを読み、その内容を要約できる。		
		14週	読むこと・聞くこと		毎分120語程度の速度で物語文や説明文などを読み、その内容を要約できる。		
		15週	定期試験		達成度を確認する。		
		16週					
評価割合							
	定期試験	外部試験	小テスト	態度	ポートフォリオ	その他	合計
総合評価割合	60	30	10	0	0	0	100
基礎的能力	60	30	10	0	0	0	100
専門的能力	0	0	0	0	0	0	0
分野横断的能力	0	0	0	0	0	0	0

鹿児島工業高等専門学校		開講年度	平成29年度 (2017年度)		授業科目	科学技術英語	
科目基礎情報							
科目番号	0026		科目区分	一般 / 選択			
授業形態	講義		単位の種別と単位数	学修単位: 2			
開設学科	電気情報システム工学専攻		対象学年	専1			
開設期	後期		週時間数	2			
教科書/教材	「Which side are you on?」 佐野泰孝, 成美堂 英和・和英辞書は既に購入しているものでよい						
担当教員	坂元 真理子						
到達目標							
英語の文章の特徴や論理的な文章・考え方について理解することができる。英語を使った学習活動を通して社会や自分のことに目を向け、物事を論理的に考え英語で発表することができる。							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安		
談話分析について	談話について理解したことを、発表や議論の中で実践することができる。		談話について理解したことを、与えられた課題や題材の中で実践することができる。		談話の概念について理解することができていない。		
英語の論理構成について	英語のパラグラフの論理構成について理解し、講義で扱う教材の内容と論点を把握したうえでそれについての自分の意見を英語でまとめ、発表したり議論したりすることができる。		英語のパラグラフの論理構成について理解し、講義で扱う教材の内容と論点を把握したうえでそれについての自分の意見を英語でまとめることができる。		英語のパラグラフの論理構成について理解し、講義で扱う教材の内容と論点を把握することができていない。		
プレゼンテーションの技法について	プレゼンテーションの技法について理解し、発表や議論の中で英語で実践することができる。		プレゼンテーションの技法について理解し、与えられた課題や題材を応用して英語で実践することができる。		プレゼンテーションの技法について理解し、与えられた課題や題材に従って英語で実践することができていない。		
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	英語で論理的にコミュニケーションを行うための基礎的な内容を学ぶレベル。本科目を履修し、2年次前期の「論理的英語コミュニケーション」につなげる。						
授業の進め方・方法	授業では講義のほか、個人、ペア、グループでの活動を行う。また決められたテーマに対し個人およびグループでプレゼンテーションや簡単なプロジェクトを行う。						
注意点	入学時に、英文法全般について理解し、その知識を用いて英文を読んだり書いたりできる程度の語学力を有していること。与えられた題材に対し、自分の考えをまとめて書いたり発表したりする活動を行う。そのため十分なやる気と、人前で自分の意見を英語で発表することを厭わない姿勢が必要とされる。授業は殆どを英語で行う。						
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
後期	3rdQ	1週	談話の概念		談話の概念について理解することができる。		
		2週	結束性と一貫性		結束性と一貫性について理解することができる。		
		3週	論理構成		論理構成について理解することができる。		
		4週	論理構成		論理構成について、与えられた題材を基に個人またはグループで実践活動を行ない、成果を発表することができる。		
		5週	英語の論理構成を形成する要素		英語の論理構成を形成する要素について理解することができる。		
		6週	英語の論理構成を形成する要素		英語の論理構成を形成する要素について、与えられた題材を基に個人またはグループで実践活動を行ない、成果を発表することができる。		
		7週	英語の論理パターンに基づいた自己表現		英語の論理パターンに基づいた自己表現について理解することができる。		
		8週	英語の論理パターンに基づいた自己表現		英語の論理パターンに基づいた自己表現について、与えられた題材を基に個人またはグループで実践活動を行ない、成果を発表することができる。		
	4thQ	9週	論理的思考		論理的思考について理解することができる。		
		10週	論理的思考		論理的思考について、与えられた題材を基に個人またはグループで実践活動を行ない、成果を発表することができる。		
		11週	論理展開と自己表現		論理展開と自己表現について理解することができる。		
		12週	論理展開と自己表現		論理展開と自己表現について、与えられた題材を基に個人またはグループで実践活動を行ない、成果を発表することができる。		
		13週	プレゼンテーションの技法		について、与えられた題材を基に個人またはグループで実践活動を行ない、成果を発表することができる。		
		14週	プレゼンテーションの技法		これまでに学んだ内容をプレゼンテーションの技法を活かして実践し、英語コミュニケーション能力の一部として身につけることができる。		
		15週	期末試験		上記授業項目について達成度を評価する。		
		16週	試験答案の返却・解説		試験において間違えた部分を自分の課題として把握する。 (非評価項目)		
評価割合							
	試験		レポート等		態度	合計	

総合評価割合	70	30	0	100
目標達成度	70	30	0	100
	0	0	0	0

鹿児島工業高等専門学校		開講年度	平成29年度 (2017年度)		授業科目	現代企業法論	
科目基礎情報							
科目番号	0027		科目区分	一般 / 選択			
授業形態	講義		単位の種別と単位数	学修単位: 2			
開設学科	電気情報システム工学専攻		対象学年	専1			
開設期	後期		週時間数	2			
教科書/教材	特に指定しないが、会社法の基本書（授業中に紹介する）を各自購入することが望ましい。/六法、会社判例百選						
担当教員	松田 忠大						
到達目標							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安		
評価項目1	会社の営利性、社団性、法人性を踏まえて、それぞれの性質から生じる諸法律問題について自分で答えを出すことができる。		会社の営利性、社団性、法人性の意義が理解できるとともに、会社の権利能力の範囲、法人性の限界について説明することができる。		会社の営利性、社団性、法人性といった基本的な性質を理解できていない。		
評価項目2	株式会社の設立手続の概要を説明でき、かつ、設立手続から生じる法的問題について、自分で考え答えを導くことができる。		株式会社の設立手続をおおむね説明でき、かつ、これに関連する法的問題を説明することができる。		株式会社の設立手続の概要を十分に説明することができない。		
評価項目3	株式の意義、法的性質を理解したうえで、有限責任原則との関係で株式が果たす役割、株式を巡る法的問題を1以上採り上げて、これを自ら考え、その答えを導くことができる。		株式の意義・法的性質を理解し、株主有限責任原則、株式の果たす役割を説明することができる。		株式会社における株式の意義を理解できていない。		
評価項目4	株式会社の基本的な機関である株主総会、取締役（会）、監査役について、それぞれの法的位置づけを理解したうえで、機関に関する法的課題を1つ以上採り上げてこれを自ら考え、その答えを導くことができる。		株式会社の基本的な機関である株主総会、取締役（会）、監査役の意義およびその果たす機能を説明することができる。				
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	資本主義社会の高度化に伴い、私たちの生活を企業活動と切り離して考えることは困難になった。わたしたちは自らの生活に必要な物資を企業から調達し、その生活物資を購入するのに必要な財貨を企業から得る。前者においては消費者と企業、後者の関係においては、労働者と企業として関わることになる。また、企業間においても、取引先、下請け、親子会社などのように相互に連結した関係が形成されている。さらに、将来、自ら会社を起こし、企業経営を行う人もいられるかもしれない。このように考えると、現代社会における企業は重大な存在意義を有していることがわかる。この講義では、この企業社会において、企業生活関係に特有な法規の総体である商法、とりわけ会社法を学習することにより、企業社会で生きるための知識を身に付けることを主な目標とする。						
授業の進め方・方法	この授業は講義を中心として行うが、必要に応じて、演習問題やレポートを課す。レポート課題については、期限内に必ず提出すること。						
注意点	教科書は特に指定しないが、価格の安いものでよいので会社法のテキスト（出版社のシリーズもの、例えば、有斐閣双書など）を一冊は購入することが望ましい。						
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
後期	3rdQ	1週	Ⅰ 近代市民法と商法（総則・商行為）概説 1. 近代市民法原理		□ 近代市民法の枠組みを理解することができる。		
		2週	2. 商行為と商人		□ 商行為の意義と商人概念を理解することができる。		
		3週	Ⅱ 会社法総説 1. 会社の概念と種類		□ 会社の営利性、社団性、法人性、会社の形態を理解することができる。 □ 法人たる会社の権利能力の範囲について理解することができる。		
		4週	2. 会社の性質と能力		□ 法人たる会社の権利能力の範囲について理解することができる。		
		5週	2. 会社の性質と能力 Ⅲ 株式会社の設立 1. 株式会社の設立手続		□ 法人たる会社の権利能力の範囲について理解することができる。 □ 定款の作成、出資の履行等、株式会社の設立手続の概要を理解することができる。		
		6週	1. 株式会社の設立手続 2. 設立手続における法律問題		□ 定款の作成、出資の履行等、株式会社の設立手続の概要を理解することができる。 □ 株式会社設立に際しての法律問題を通して、発起人の権限、責任を理解することができる。		
		7週	2. 設立手続における法律問題 Ⅳ 株式会社における株式と株主の概念 1. 株主の意義と有限責任		□ 株式会社設立に際しての法律問題を通して、発起人の権限、責任を理解することができる。		
		8週	2. 株式と株主名簿		□ 株式の意義、株式の機能と種類、株式併合と分割、法律問題を通して、株式の自由譲渡性、自己株取得、株主名簿の意義について基本的事項を理解することができる。		
	4thQ	9週	3. 募集株式の発行と新株予約権		□ 株式会社の資金調達方法（募集株式の発行、社債の発行など）と新株予約権についての基礎的事項を理解することができる。		

		10週	V 株式会社の機関 1. 株主総会	☐ 会社法における株式会社の機関設計を概観した後、株主総会の招集・決議に関する法律問題を通して、株主総会の意義を理解することができる。
		11週	2. 取締役及び取締役会	☐ 法律問題を通して、取締役の職務、義務、会社に対する責任を理解することができる。
		12週	2. 取締役及び取締役会 3. 会計参与、監査役、監査役会、会計監査人	☐ 法律問題を通して、取締役の職務、義務、会社に対する責任を理解することができる。 ☐ 株式会社の会計参与の意義、監査制度の基礎を理解することができる。
		13週	4. 委員会設置会社 5. 役員等の損害賠償責任	☐ 委員会制度の概要を理解することができる。 ☐ 役員等の負う法的責任を理解することができる。
		14週	VI 会社の計算 1. 企業会計原則と計算に関する法的規制 VII 株式会社の解散と清算 1. 解散と清算	☐ 株式会社の計算書類に関する基本的事項を理解することができる。 ☐ 会社の解散原因と清算のしくみについて理解することができる。
		15週	試験答案の返却・解説	試験において間違えた部分を自分の課題として把握する
		16週		

評価割合

	試験	発表	相互評価	態度	ポートフォリオ	その他	合計
総合評価割合	70	0	0	0	0	30	100
基礎的能力	70	0	0	0	0	30	100
専門的能力	0	0	0	0	0	0	0
分野横断的能力	0	0	0	0	0	0	0

鹿児島工業高等専門学校		開講年度	平成29年度 (2017年度)		授業科目	国際関係論		
科目基礎情報								
科目番号	0028			科目区分	一般 / 選択			
授業形態	講義			単位の種別と単位数	学修単位: 2			
開設学科	電気情報システム工学専攻			対象学年	専1			
開設期	前期			週時間数	2			
教科書/教材	授業中に適宜指示します							
担当教員	藤内 哲也							
到達目標								
1. 国際関係の成立と発展の歴史的過程について説明できる。 2. 現代の国際関係における諸問題について説明できる。 3. 現代の国際関係における日本の位置づけについて説明できる。								
ルーブリック								
	理想的な到達レベルの目安			標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安		
評価項目1	国際関係の成立と発展の過程に関する高度な事項について理解し、説明することができる。			国際関係の成立と発展の過程に関する基本的な事項について理解し、説明することができる。		国際関係の成立と発展の過程に関する基本的な事項について理解していない。		
評価項目2	現代の国際関係における諸問題に関する高度な事項について理解し、説明することができる。			現代の国際関係における諸問題に関する基本的な事項について理解し、説明することができる。		現代の国際関係における諸問題に関する基本的な事項について理解していない。		
評価項目3	現代の国際関係における日本の位置づけに関する高度な事項について理解し、説明することができる。			現代の国際関係における日本の位置づけに関する基本的な事項について理解し、説明することができる。		現代の国際関係における日本の位置づけに関する基本的な事項について理解していない。		
学科の到達目標項目との関係								
教育方法等								
概要	国際関係をめぐる基礎的な知識を身につけ、現実世界の諸問題について多角的に考察できるようにする。							
授業の進め方・方法	①国際関係の成立と発展の過程、②現代の国際関係における諸問題に関する基本的な事項を理解していることを重視する。授業では多くの発問によって関心を引き出すとともに、重要なキーワードの定着・理解を図る。また、国際関係に関する諸課題について、自分に関わる身近な問題として考えることを促す。							
注意点	現実世界で起こっていることについて興味を持ち、自ら考えて行動する習慣を身につけること。							
授業計画								
前期	1stQ	週	授業内容			週ごとの到達目標		
		1週	(1) 国際関係へのまなざし			☐ 国際関係を学ぶ意義や視座について説明できる。		
		2週	(2) 歴史のなかの国際関係			☐ 歴史世界のさまざまな国際関係のあり方について説明できる。		
		3週	(3) 宗教・民族・国家			☐ 国家の基盤や国際紛争の要因となる宗教や民族について説明できる。		
		4週	(4) 国際社会の成立			☐ ルネサンスからウェストファリア条約に至る国際社会の成立過程について説明できる。		
		5週	(5) 国民国家とナショナリズム			☐ 国民国家とナショナリズムについて説明できる。		
		6週	(6) 帝国主義と世界大戦			☐ 帝国主義時代の国際関係と二度の世界大戦について説明できる。		
		7週	(7) 冷戦体制			☐ 冷戦体制下の国際関係について説明できる。		
	2ndQ	8週	(8) 21世紀の国際関係			☐ 9. 11後の国際関係について説明できる。		
		9週	(9) 先進国と途上国			☐ 先進国と途上国の関係について説明できる。		
		10週	(10) 国家と地域			☐ 国家を超えた広域的な枠組みについて説明できる。		
		11週	(11) 自立する地域			☐ 国家を構成する地域と、その自立化傾向について説明できる。		
		12週	(12) 地域紛争			☐ 現在の国際紛争について説明できる。		
		13週	(13) グローバル化の進展			☐ モノ・ヒト・カネの世界的な移動について議論できるようにする。		
		14週	(14) まとめと展望			☐ 国際関係や国際紛争について、さまざまな立場や考え方に立って説明できる。		
		15週	試験答案の返却・解説			試験において間違えた部分を自分の課題として把握する。 (非評価項目)		
16週								
評価割合								
	試験	発表	相互評価	態度	ポートフォリオ	その他	合計	
総合評価割合	100	0	0	0	0	0	100	
基礎的能力	100	0	0	(-20)	0	0	100	
専門的能力	0	0	0	0	0	0	0	
分野横断的能力	0	0	0	0	0	0	0	

鹿児島工業高等専門学校		開講年度	平成29年度 (2017年度)		授業科目	電磁気学特論	
科目基礎情報							
科目番号	0003			科目区分	専門 / 選択		
授業形態	講義			単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	電気情報システム工学専攻			対象学年	専1		
開設期	前期			週時間数	2		
教科書/教材	なし						
担当教員	玉利 陽三						
到達目標							
本科での電磁気学やベクトルの発散や回転などのベクトル解析を復習する。さらに、ベクトルを用いて電磁気学の問題を解き、電磁気学を再理解する。最後に、身近な電磁気学の応用や生体に与える影響等について紹介する。							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安			標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
1. 電磁気学の諸法則についてベクトルを使って説明できる。	電磁気学で重要な諸法則をベクトルを使って説明でき、それを応用できる。			電磁気学で重要な諸法則をベクトルを使って説明できる。		電磁気学で重要な諸法則をベクトルを使って説明できない。	
身の回りの電磁気学の応用について説明できる。	身の回りにある電磁気学の応用されているものについて説明でき、さらに新たなものを提案できる。			身の回りにある電磁気学が応用されているものについて説明できる。		身の回りにある電磁気学が応用されているものについて説明できない。	
評価項目3							
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	これまで学習してきた電気磁気学を再理解していく。						
授業の進め方・方法	講義形式で進めていくが、最後に自らの研究と電気磁気学の関わりについて発表する。						
注意点	講義内容をよく理解するために、毎回、これまで使ってきた教科書等を参考に2時間程度の予習をし、授業時間での質問等に対応できるようにしておくこと。また、講義終了後は、復習として2時間程度の演習問題等の課題に取り組むこと。疑問点があれば、その都度質問すること。						
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
前期	1stQ	1週	ベクトル解析		勾配、発散、回転の物理的意味が説明でき、計算できる。		
		2週	ベクトル解析		ストークスの定理が説明できる。		
		3週	電磁界の基本的な法則		電磁気学の歴史を認知し、説明できる。		
		4週	電磁界の基本的な法則		電磁気学の歴史を認知し、説明できる。		
		5週	電磁界の基本的な法則		電磁気学の歴史を認知し、説明できる。		
		6週	電磁界の基本的な法則		ガウスの法則を説明できる。		
		7週	電磁界の基本的な法則		アンペールの法則を説明できる。		
		8週	電磁界の基本的な法則		電磁誘導の法則を理解して説明できる。		
	2ndQ	9週	電磁界の基本的な法則		マクスウェルの方程式の微分形の導出ができる。		
		10週	生体に及ぼす電磁界の効果		電界が生体を与える影響を認知し、説明できる。		
		11週	生体に及ぼす電磁界の効果		磁界が生体を与える影響を認知し、説明できる。		
		12週	生体に及ぼす電磁界の効果		電磁波が生体を与える影響を認知し、説明できる。		
		13週	電磁界の応用		身近に電磁界が応用されているものを調べ、動作原理を説明できる。		
		14週	電磁界の応用		自分の研究と電磁界との関係をまとめて報告できる。		
		15週	定期試験		これまで学習した内容の理解を深める。		
		16週	試験答案の返却・解説		試験において間違えた部分を自分の課題として把握できる。		
評価割合							
	試験	発表	相互評価	態度	ポートフォリオ	その他	合計
総合評価割合	70	0	0	0	0	30	100
基礎的能力	0	0	0	0	0	0	0
専門的能力	70	0	0	0	0	30	100
分野横断的能力	0	0	0	0	0	0	0

鹿児島工業高等専門学校	開講年度	平成29年度 (2017年度)	授業科目	電力システム解析
科目基礎情報				
科目番号	0005	科目区分	専門 / 選択	
授業形態	講義	単位の種別と単位数	学修単位: 2	
開設学科	電気情報システム工学専攻	対象学年	専1	
開設期	前期	週時間数	2	
教科書/教材	Energy Flow and Power Factor in Nonsinusoidal Circuits Shepherd & Zand著 (Cambridge University Press)			
担当教員	中村 格			
到達目標				
電力システムの機器に生じる高調波障害の事例を説明でき、ひずみ波の発生と挙動について説明できる。また、高調波への対策をひずみ波電流による力率低下の補償として捉え、その方法を説明できる。				
ルーブリック				
	理想的な到達レベルの目安	標準的な到達レベルの目安	未到達レベルの目安	
1. フェーザ、インピーダンスを説明できる。	フェーザ、インピーダンスを問題なく明確に説明できる。	フェーザ、インピーダンスについて不明確な部分があるが、比較的明確に説明できる。	フェーザ、インピーダンスの説明が不明確である。	
2. 電力の「三角形」、線形負荷での電力の流れ、一般化した等価回路、力率補償を説明できる。	電力の「三角形」、線形負荷での電力の流れ、一般化した等価回路、力率補償を問題なく明確にできる。	電力の「三角形」、線形負荷での電力の流れ、一般化した等価回路、力率補償について不明確な部分があるが、比較的明確にできる。	電力の「三角形」、線形負荷での電力の流れ、一般化した等価回路、力率補償の説明が不明確である。	
3. ひずみ率、ひずみ電力、電力の「直方体」、非線形負荷での電力の流れ、一般化した等価回路、力率補償、高調波への対策を説明できる。	ひずみ率、ひずみ電力、電力の「直方体」、非線形負荷での電力の流れ、一般化した等価回路、力率補償、高調波への対策を問題なく明確に説明できる。	ひずみ率、ひずみ電力、電力の「直方体」、非線形負荷での電力の流れ、一般化した等価回路、力率補償、高調波への対策について不明確な部分があるが、比較的明確に説明できる。	ひずみ率、ひずみ電力、電力の「直方体」、非線形負荷での電力の流れ、一般化した等価回路、力率補償、高調波への対策の説明が不明確である。	
4. 高調波障害の実態を説明できる。	高調波障害の実態を問題なく明確に説明できる。	高調波障害の実態について不明確な部分があるが、比較的明確に説明できる。	高調波障害の実態の説明が不明確である。	
学科の到達目標項目との関係				
教育方法等				
概要	電気回路、送配電工学の知識を必要とし、また、ひずみ波を扱うことから、フーリエ級数の知識も必要である。			
授業の進め方・方法	本科目はゼミ形式で行うことから、課題を指示された部分については、教材を和訳して内容に関して調べ、資料の準備を行い、説明できるようにしておく事。			
注意点	毎回、補助教材等を参考に105分以上の予習を行い、授業時間に討論できるようにしておく事。授業終了後は105分以上の復習を行い、内容は勿論の事、英文での表現法等も自分のものとしてゆく事。疑問点があれば、その都度質問する事。			
授業計画				
		週	授業内容	週ごとの到達目標
前期	1stQ	1週	1. 基礎理論	(1) フェーザ、インピーダンスを説明できる。
		2週	2. 正弦波電圧を供給した線形負荷	(1) 電力の「三角形」、線形負荷での電力の流れ、一般化した等価回路、力率補償を説明できる。
		3週	2. 正弦波電圧を供給した線形負荷	(1) 電力の「三角形」、線形負荷での電力の流れ、一般化した等価回路、力率補償を説明できる。
		4週	2. 正弦波電圧を供給した線形負荷	(1) 電力の「三角形」、線形負荷での電力の流れ、一般化した等価回路、力率補償を説明できる。
		5週	2. 正弦波電圧を供給した線形負荷	(1) 電力の「三角形」、線形負荷での電力の流れ、一般化した等価回路、力率補償を説明できる。
		6週	2. 正弦波電圧を供給した線形負荷	(1) 電力の「三角形」、線形負荷での電力の流れ、一般化した等価回路、力率補償を説明できる。
		7週	2. 正弦波電圧を供給した線形負荷	(1) 電力の「三角形」、線形負荷での電力の流れ、一般化した等価回路、力率補償を説明できる。
		8週	3. 正弦波電圧を供給した非線形負荷	(1) ひずみ率、ひずみ電力、電力の「直方体」、非線形負荷での電力の流れ、一般化した等価回路、力率補償、高調波への対策を説明できる。
	2ndQ	9週	3. 正弦波電圧を供給した非線形負荷	(1) ひずみ率、ひずみ電力、電力の「直方体」、非線形負荷での電力の流れ、一般化した等価回路、力率補償、高調波への対策を説明できる。
		10週	3. 正弦波電圧を供給した非線形負荷	(1) ひずみ率、ひずみ電力、電力の「直方体」、非線形負荷での電力の流れ、一般化した等価回路、力率補償、高調波への対策を説明できる。
		11週	3. 正弦波電圧を供給した非線形負荷	(1) ひずみ率、ひずみ電力、電力の「直方体」、非線形負荷での電力の流れ、一般化した等価回路、力率補償、高調波への対策を説明できる。
		12週	3. 正弦波電圧を供給した非線形負荷	(1) ひずみ率、ひずみ電力、電力の「直方体」、非線形負荷での電力の流れ、一般化した等価回路、力率補償、高調波への対策を説明できる。
		13週	3. 正弦波電圧を供給した非線形負荷	(1) ひずみ率、ひずみ電力、電力の「直方体」、非線形負荷での電力の流れ、一般化した等価回路、力率補償、高調波への対策を説明できる。
		14週	4. 高調波障害の実態	(1) 高調波障害の実態を説明できる。
		15週	--- 定期試験 ---	授業内容1~4について達成度を確認する。
		16週		
評価割合				

	発表・討論	レポート	試験	受講態度	合計
総合評価割合	40	20	40	0	100
基礎的能力	0	0	0	0	0
専門的能力	40	20	40	上限-20	100
分野横断的能力	0	0	0	0	0

鹿児島工業高等専門学校		開講年度	平成29年度 (2017年度)		授業科目	電子回路解析	
科目基礎情報							
科目番号	0006			科目区分	専門 / 選択		
授業形態	講義			単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	電気情報システム工学専攻			対象学年	専1		
開設期	後期			週時間数	2		
教科書/教材	スイッチングコンバータの基礎 原田耕介 二宮保 顧文建 共著 コロナ社/パワーエレクトロニクス回路 電気学会・半導体電力変換システム調査専門委員会編 オーム社/授業時配布プリント						
担当教員	寺師 裕人						
到達目標							
1. 2つ以上の動作モードを持つスイッチング回路 2. 各動作モードにおける状態方程式とその平均化法 3. 平均化方程式の特性解析 4. アプリケーションソフトによる動作の確認							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安			標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1	インダクタとキャパシタが各1ケであるスイッチングモード基本回路、各2ケである基本回路を理解できる。			インダクタとキャパシタが各1ケであるスイッチング基本回路の動作を説明できる。		インダクタとキャパシタが各1ケであるスイッチング基本回路の動作を説明できない。	
評価項目2	インダクタ、キャパシタ、スイッチの3種の基本トポロジ回路の状態方程式を各モード別に作成でき、平均化できる。			インダクタ、キャパシタ、スイッチを用いたトポロジ回路の2つのモードの状態方程式を作成できその2つのモードの平均化できる。		インダクタ、キャパシタ、スイッチを用いたトポロジ回路の2つのモードの状態方程式を作成できない。	
評価項目3	状態平均化方程式を用いて固有値を求めて安定性の確認や動特性、静特性等の周波数特性図を作成できる。			状態平均化方程式を用いて動特性、静特性等の周波数特性図を作成できる。		状態平均化方程式を用いて動特性、静特性等の周波数特性図を作成できない。	
評価項目4	アプリケーションソフトを用いて動作波形を確認しトポロジ回路の動作原理を理解でき設計仕様に応じた定数を決定できる。			アプリケーションソフトを用いて動作波形を確認しトポロジ回路の動作原理を理解できる。		アプリケーションソフトを用いて動作波形を確認しトポロジ回路の動作原理を理解できない。	
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	半導体スイッチング素子とR,L,C素子で構成される電子回路において、素子のスイッチング状態が定まるとその動作モードから状態方程式が導出される。これを基に、回路の種々の動作モードにおける各状態方程式を平均化した方程式を用いた解析手法を学び、非線形電子回路の解析について習熟する。						
授業の進め方・方法	2つの動作モードを持つスイッチングモード非線形電子回路において各々の動作モードを平均化合成することで線形化して解析する方法を学ぶ。アプリケーションソフトでシミュレーションし、必要な波形を描画して動作を確認しながら授業をおこなう。						
注意点	電子回路のモデリングとスイッチング特性を理解し、修得するためには、多くの回路解析を行うことが大事である。このため課せられたレポートは必ず理解して提出すること。また、解らない点があればその都度質問をし、積極的に理解を深めるようにすること。						
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
後期	3rdQ	1週	1. 半導体スイッチの基礎		□半導体デバイスのスイッチング損失, スwitchング特性が説明できる。		
		2週	2. スwitchング回路と動作状態		□簡単なスイッチング回路 (PWM回路) の動作状態を説明できる。		
		3週	3. 状態方程式		□電子回路の動作状態の方程式を説明できる。		
		4週	3. 状態方程式		□電子回路の動作状態の方程式を説明できる。		
		5週	4. 状態平均化法		□状態平均化方程式による非線形回路の線形的な取り扱いができる。		
		6週	4. 状態平均化法		□状態平均化方程式による非線形回路の線形的な取り扱いができる。		
		7週	5. 状態方程式に基づく回路解析		□状態変数, 状態方程式, 出力方程式によるR,L,C素子の回路解析ができる。		
		8週	5. 状態方程式に基づく回路解析		□状態変数, 状態方程式, 出力方程式によるR,L,C素子の回路解析ができる。		
	4thQ	9週	6. 状態平均化法による電子回路解析		□状態平均化法を用いた静特性解析, 動特性の解析ができる。		
		10週	6. 状態平均化法による電子回路解析		□状態平均化法を用いた静特性解析, 動特性の解析ができる。		
		11週	7. 数値計算による電子回路解析		□アプリケーションソフトによる電子回路の数値計算と動作解析ができる。		
		12週	7. 数値計算による電子回路解析		□アプリケーションソフトによる電子回路の数値計算と動作解析ができる。		
		13週	7. 数値計算による電子回路解析		□アプリケーションソフトによる電子回路の数値計算と動作解析ができる。		
		14週	7. 数値計算による電子回路解析		□アプリケーションソフトによる電子回路の数値計算と動作解析ができる。		
		15週	試験答案の返却・解説		試験において間違った部分を自分の課題として把握する。(非評価項目)		
		16週					

評価割合							
	試験	発表	相互評価	態度	ポートフォリオ	その他	合計
総合評価割合	70	0	0	0	0	30	100
基礎的能力	0	0	0	0	0	0	0
専門的能力	70	0	0	0	0	30	100
分野横断的能力	0	0	0	0	0	0	0

鹿児島工業高等専門学校		開講年度	平成29年度 (2017年度)		授業科目	電気電子工学特別演習	
科目基礎情報							
科目番号	0009			科目区分	専門 / 選択		
授業形態	演習			単位の種別と単位数	学修単位: 1		
開設学科	電気情報システム工学専攻			対象学年	専1		
開設期	前期			週時間数	1		
教科書/教材							
担当教員	今村 成明						
到達目標							
電気回路学、電磁気学の基礎的事項を基に、種々の応用問題を解くことにより更に理解を深め、大学で取り扱われる電気回路学、電磁気学の問題を十分に解けるレベルまで応用力を高めていく。以下に具体的な目標を示す。 1. 網目法、枝電流法、重ねの理、テブナンの定理、ノートンの定理などの回路網解析手法を理解し、各種回路の電圧、電流、電力を計算できる。 2. 過渡現象、時定数の意味を理解し、微分方程式の解法とラプラス変換を用いて、各種回路の過渡現象における一般解を算出できる。 3. クーロンの法則、電界と電位、ガウスの法則の概念を理解し、各種条件における静電気力、電界、電位、静電容量、静電エネルギーを計算できる。 4. ビオ・サバルの法則、アンペアの法則の概念を理解し、各種条件における磁界の強さ、磁束密度、磁界中の電流に働く力、ローレンツ力を計算できる。 5. レンツの法則、ファラデーの電磁誘導の法則の概念を理解し、起電力、インダクタンス、磁界のエネルギーを計算できる。							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安		
評価項目1	各種回路網解析手法を用いて、直流・交流各種回路の電圧、電流、電力を計算できる。		各種回路網解析手法のどれか一つを用いて、直流・交流各種回路の電圧、電流、電力を計算できる。		回路網解析手法が理解できず、直流・交流各種回路の電圧、電流、電力を計算できない。		
評価項目2	過渡現象、時定数の意味を理解し、微分方程式の解法およびラプラス変換を用いて、各種回路の過渡現象における一般解を算出できる。		過渡現象、時定数の意味を理解し、微分方程式の解法、ラプラス変換のどちらかを用いて、各種回路の過渡現象における一般解を算出できる		過渡現象、時定数の意味が理解できず、微分方程式の解法、ラプラス変換のどちらかの方法を用いても、各種回路の過渡現象における一般解を算出できない。		
評価項目3	クーロンの法則、電界と電位、ガウスの法則の概念を理解し、各種条件における静電気力、電界、電位、静電容量、静電エネルギーを計算できる。		クーロンの法則、電界と電位、ガウスの法則の概念を理解し、ある特定の条件における静電気力、電界、電位、静電容量、静電エネルギーを計算できる。		クーロンの法則、電界と電位、ガウスの法則の概念が理解できず、静電気力、電界、電位、静電容量、静電エネルギーを計算できない。		
評価項目4	ビオ・サバルの法則、アンペアの法則の概念を理解し、各種条件における磁界の強さ、磁束密度、磁界中の電流に働く力、ローレンツ力を計算できる。		ビオ・サバルの法則、アンペアの法則の概念を理解できず、ある特定の条件における磁界の強さ、磁束密度、磁界中の電流に働く力、ローレンツ力を計算できる。		ビオ・サバルの法則、アンペアの法則の概念を理解できず、磁界の強さ、磁束密度、磁界中の電流に働く力、ローレンツ力を計算できない。		
評価項目5	レンツの法則、ファラデーの電磁誘導の法則の概念を理解し、各種条件における起電力、インダクタンス、磁界のエネルギーを計算できる。		レンツの法則、ファラデーの電磁誘導の法則の概念を理解できず、ある特定の条件における起電力、インダクタンス、磁界のエネルギーを計算できる。		レンツの法則、ファラデーの電磁誘導の法則の概念を理解できず、起電力、インダクタンス、磁界のエネルギーを計算できない。		
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	電気電子工学科卒および情報工学科卒の学生が対象である。本校専攻科入学時まで履修した電気回路、電磁気学に関する知識を総結集し、復習あるいは新たな学習により、電気回路、電磁気学の基本事項を確実に把握し、応用問題を解くことのできる実力を身につける。						
授業の進め方・方法	講義内容をよく理解するために、毎回、事前に渡された演習問題（宿題）は解いておき、授業時間での質問等に対応できるようにしておくこと。						
注意点	講義終了後は、復習として演習問題等の課題に取り組むこと。疑問点があれば、その都度質問すること。						
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
前期	1stQ	1週	直流回路、対称回路		網目法、枝電流法、重ねの理、テブナンの定理、ノートンの定理を理解し、各種回路の回路電圧、回路電流、電力を計算できる。 ブリッジ回路の平衡条件を理解し、未知の抵抗値などを計算できる。		
		2週	交流回路		正弦波交流、ベクトル記号法、インピーダンスとアドミタンス、交流電力、電力のベクトル表示、直列共振、並列共振、多相交流、多相交流の電力を理解し、各種回路の計算ができる。		
		3週	交流回路		正弦波交流、ベクトル記号法、インピーダンスとアドミタンス、交流電力、電力のベクトル表示、直列共振、並列共振、多相交流、多相交流の電力を理解し、各種回路の計算ができる。		
		4週	過渡現象		過渡現象、時定数の意味を理解し、微分方程式の解法とラプラス変換を用いて、各種回路の過渡現象における一般解を算出できる。		
		5週	過渡現象		過渡現象、時定数の意味を理解し、微分方程式の解法とラプラス変換を用いて、各種回路の過渡現象における一般解を算出できる。		
		6週	真空中の静電界、導体系		クーロンの法則、電界と電位、ガウスの法則、電気双極子、静電容量、静電エネルギーと静電気力の概念を理解し、各種条件における計算ができる。		
		7週	真空中の静電界、導体系		クーロンの法則、電界と電位、ガウスの法則、電気双極子、静電容量、静電エネルギーと静電気力の概念を理解し、各種条件における計算ができる。		

2ndQ	8週	真空中の静電界，導体系	クーロンの法則，電界と電位，ガウスの法則，電気双極子，静電容量，静電エネルギーと静電気力の概念を理解し，各種条件における計算ができる。
	9週	誘電体中の静電界	誘電分極，誘電体中の電界について理解し，各種条件における計算ができる。 誘電体界面での電界Eと電束密度Dの境界条件を理解し，各種条件における計算ができる。 誘電体に蓄えられるエネルギー，誘電体境界面に働く力について各種条件における計算ができる。
	10週	誘電体中の静電界	誘電分極，誘電体中の電界について理解し，各種条件における計算ができる。 誘電体界面での電界Eと電束密度Dの境界条件を理解し，各種条件における計算ができる。 誘電体に蓄えられるエネルギー，誘電体境界面に働く力について各種条件における計算ができる。
	11週	定常電流と磁界，磁性体	ビオ・サバールの法則，アンペアの法則の概念を理解し，各種条件における計算ができる。 磁位，ベクトルポテンシャルの概念を用いて計算ができる。 磁界中の電流に働く力，磁性体中の磁界の強さについて計算ができる。 磁性体界面での磁界の強さHと磁束密度Bの境界条件を理解し，各種条件における計算ができる。 各種磁気回路の計算ができる。
	12週	定常電流と磁界，磁性体	ビオ・サバールの法則，アンペアの法則の概念を理解し，各種条件における計算ができる。 磁位，ベクトルポテンシャルの概念を用いて計算ができる。 磁界中の電流に働く力，磁性体中の磁界の強さについて計算ができる。 磁性体界面での磁界の強さHと磁束密度Bの境界条件を理解し，各種条件における計算ができる。 各種磁気回路の計算ができる。
	13週	電磁誘導	レンツの法則，ファラデーの電磁誘導の法則の概念を理解し，各種条件における計算ができる。 変圧器起電力と速度起電力の概念を理解し，各種条件における計算ができる。 インダクタンス，磁界のエネルギーについて各種条件における計算ができる。
	14週	電磁誘導	レンツの法則，ファラデーの電磁誘導の法則の概念を理解し，各種条件における計算ができる。 変圧器起電力と速度起電力の概念を理解し，各種条件における計算ができる。 インダクタンス，磁界のエネルギーについて各種条件における計算ができる。
	15週	定期試験	これまでに学習した内容に対し達成度を確認する。
	16週	試験答案の返却・解説	試験において間違った部分を自分の課題として把握する（非評価項目）。

評価割合

	試験	レポート	その他	合計
総合評価割合	60	40	0	100
基礎的能力	0	0	0	0
専門的能力	60	40	0	100
分野横断的能力	0	0	0	0

鹿児島工業高等専門学校		開講年度	平成29年度 (2017年度)		授業科目	情報工学特別演習
科目基礎情報						
科目番号	0010		科目区分	専門 / 選択		
授業形態	演習		単位の種別と単位数	学修単位: 1		
開設学科	電気情報システム工学専攻		対象学年	専1		
開設期	後期		週時間数	1		
教科書/教材	業時配布プリント（演習問題、大学院入試問題等）、本科、専攻科の計算機ソフトウェアに関する授業で使った教科書、パソコンで学ぶ言語聴覚士と高専学生のための音響・音声工学入門、幸田晃、斯文堂					
担当教員	幸田 晃,芝 浩二郎,原 崇					
到達目標						
計算機ソフトウェア（情報数学、アルゴリズム、プログラミング等）と計算機ハードウェア（論理回路、計算機工学、情報ネットワーク）の基本事項を基に種々の応用演習問題を解くことにより、さらに計算機ソフトウェアと計算機ハードウェアに関する理解を深める。						
ルーブリック						
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1	FFTを理解し、プログラミングできる。		FFTを理解し、2の3乗まで手計算できる。		FFTを理解しているが、2の3乗を手計算できない。	
評価項目2	数値解析プログラミングに関する問題を解くことができ、関連する項目について説明ができる。		数値解析プログラミングに関する問題を解くことができる。		数値解析プログラミングに関する問題を解くことができない。	
評価項目3	計算機工学に関する問題を解くことができ、関連する項目について説明ができる。		計算機工学に関する問題を解くことができる。		計算機工学に関する問題を解くことができない。	
学科の到達目標項目との関係						
教育方法等						
概要	電気電子工学科卒および情報工学科卒の学生が対象である。本科で履修した計算機ソフトウェアと計算機ハードウェアに関する知識を総結集し、復習あるいは新たな学習により計算機ソフトウェアと計算機ハードウェアの基本事項を確実に把握し、応用問題（大学院入試問題）を解くことのできる実をつける。					
授業の進め方・方法	与えられた課題は予習とする。授業では学生が予習した内容について解説、質疑応答を行う。					
注意点	事前に渡された演習問題（宿題）は解いて授業にのぞむこと。当番の学生は問題の説明と板書した解法の実行を行う。講義の内容をよく理解するために、毎回、予習や演習問題等の課題を含む復習として、自学自習が必要である。					
授業計画						
		週	授業内容		週ごとの到達目標	
後期	3rdQ	1週	FFTプログラミング		FFTアルゴリズムを手計算できる。FFTの基礎的なプログラムを組み、応用する事ができる。	
		2週	FFTプログラミング		FFTアルゴリズムを手計算できる。FFTの基礎的なプログラムを組み、応用する事ができる。	
		3週	FFTプログラミング		FFTアルゴリズムを手計算できる。FFTの基礎的なプログラムを組み、応用する事ができる。	
		4週	FFTプログラミング		FFTアルゴリズムを手計算できる。FFTの基礎的なプログラムを組み、応用する事ができる。	
		5週	FFTプログラミング		FFTアルゴリズムを手計算できる。FFTの基礎的なプログラムを組み、応用する事ができる。	
		6週	数値解析プログラミング		数値解析の基礎的なアルゴリズム、プログラム等に関する問題を解くことができ、誤差の種類や性質について生じる問題を解決できる。	
		7週	数値解析プログラミング		数値解析の基礎的なアルゴリズム、プログラム等に関する問題を解くことができ、誤差の種類や性質について生じる問題を解決できる。	
		8週	数値解析プログラミング		数値解析の基礎的なアルゴリズム、プログラム等に関する問題を解くことができ、誤差の種類や性質について生じる問題を解決できる。	
	4thQ	9週	数値解析プログラミング		数値解析の基礎的なアルゴリズム、プログラム等に関する問題を解くことができ、誤差の種類や性質について生じる問題を解決できる。	
		10週	数値解析プログラミング		数値解析の基礎的なアルゴリズム、プログラム等に関する問題を解くことができ、誤差の種類や性質について生じる問題を解決できる。	
		11週	計算機工学		ノイマン型コンピュータ、CPU構成とマイクロプログラム、メモリ構成、アドレス変換、高速化技術（パイプライン、キャッシュ、ヒット率、置換え）、仮想記憶（ページング、TLB、置換え）、機械語命令とプログラムなどについて理解し、応用できる。	
		12週	計算機工学		ノイマン型コンピュータ、CPU構成とマイクロプログラム、メモリ構成、アドレス変換、高速化技術（パイプライン、キャッシュ、ヒット率、置換え）、仮想記憶（ページング、TLB、置換え）、機械語命令とプログラムなどについて理解し、応用できる。	
		13週	計算機工学		ノイマン型コンピュータ、CPU構成とマイクロプログラム、メモリ構成、アドレス変換、高速化技術（パイプライン、キャッシュ、ヒット率、置換え）、仮想記憶（ページング、TLB、置換え）、機械語命令とプログラムなどについて理解し、応用できる。	

		14週	計算機工学	ノイマン型コンピュータ、CPU構成とマイクロプログラム、メモリ構成、アドレス変換、高速化技術（パイプライン、キャッシュ、ヒット率、置換え）、仮想記憶（ページング、TLB、置換え）、機械語命令とプログラムなどについて理解し、応用できる。	
		15週	計算機工学	ノイマン型コンピュータ、CPU構成とマイクロプログラム、メモリ構成、アドレス変換、高速化技術（パイプライン、キャッシュ、ヒット率、置換え）、仮想記憶（ページング、TLB、置換え）、機械語命令とプログラムなどについて理解し、応用できる。	
		16週			
評価割合					
		試験	演習	態度	合計
総合評価割合		60	40	0	100
基礎的能力		0	0	0	0
専門的能力		60	40	0	100
分野横断的能力		0	0	0	0

鹿児島工業高等専門学校		開講年度	平成29年度 (2017年度)		授業科目	環境プロセス工学	
科目基礎情報							
科目番号	0014			科目区分	専門 / 必修		
授業形態	講義			単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	電気情報システム工学専攻			対象学年	専1		
開設期	後期			週時間数	2		
教科書/教材	〔教科書〕 よくわかる 環境工学 伊藤 禎彦 他著 理工図書						
担当教員	大竹 孝明						
到達目標							
地球の温暖化現象、酸性雨やオゾン層の破壊等、環境問題は国単位から地球レベルでの生態系の調和の問題へと国際的な関心が高まっている。人間活動である技術が社会環境に及ぼす影響を正確に認識し、また、人間活動と自然環境の相互作用において生産活動を行い、かつ、環境保全に努め、よりよい環境を作り上げていかなければならない。これらを如何に成すべきかということをテーマに、人間活動と環境との相互作用の理解に重点を置き、技術者が社会に対して負う責任を理解し、生産活動に従事する技術者として必要な環境問題全般に通ずる知識を習得して、地球環境に配慮したものづくりが提案できる能力を身につけることを目的とする。							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安			標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1 環境汚染メカニズムと汚染防止プロセス、地球温暖化の機構や二酸化炭素の排出規制、酸性雨のメカニズム、酸性雨のpHが5.6以下であること及びオゾン層破壊のメカニズム、フロンを説明できる。	環境汚染メカニズムと汚染防止プロセスや地球温暖化等の地球環境問題のメカニズムと共に、その対策等も説明できる。			環境汚染メカニズムと汚染防止プロセスや地球温暖化等の地球環境問題のメカニズムを説明できる。		環境汚染メカニズムと汚染防止プロセスや地球温暖化等の地球環境問題のメカニズムも説明ができない。	
評価項目2 環境行政の歴史、現状等、環境基本法や環境アセスメント法及び生態系の保全と再生のための河川環境対策の具体的事例等について説明できる。	環境行政、環境基本法や環境アセスメント法及び生態系の保全と再生のための河川環境対策の具体的事例等と共に、過去の公害事例についても説明できる。			環境行政、環境基本法や環境アセスメント法及び生態系の保全と再生のための河川環境対策の具体的事例について説明できる。		環境行政、環境基本法や環境アセスメント法及び生態系の保全と再生のための河川環境対策の具体的事例についても説明できない。	
評価項目3 水質汚濁の概要、汚濁物の分類や指標、微生物処理操作における好気性処理や活性汚泥法、化学反応の機構と速度や、0次、1次及び2次反応、化学反応操作における回分及び連続操作、生物反応工学についての酵素反応（ミカエリス・メンテンの式等）と共に、水質汚濁の対策等も説明できる。	水質汚濁、微生物処理操作、化学反応の機構と速度、化学反応操作における回分及び連続操作、生物反応工学についての酵素反応（ミカエリス・メンテンの式等）と共に、水質汚濁の対策等も説明できる。			水質汚濁、微生物処理操作、化学反応の機構と速度、化学反応操作における回分及び連続操作、生物反応工学についての酵素反応（ミカエリス・メンテンの式等）を説明できる。		水質汚濁、微生物処理操作、化学反応の機構と速度、化学反応操作における回分及び連続操作、生物反応工学についての酵素反応（ミカエリス・メンテンの式等）についても説明できない。	
評価項目4 ガス状物質と粒子状物質の性質や体積基準と重量基準の単位、ガス状物質の除去操作、ヘンリーの法則、溶解度、気液平衡及び吸収操作及び粒子状物質の性状や集じん処理操作を説明できる。	ガス状物質と粒子状物質の性質や体積基準と重量基準の単位、ガス状物質の除去操作、ヘンリーの法則、溶解度、気液平衡及び吸収操作及び粒子状物質の性状や集じん処理操作と共に、大気汚染の対策等も説明できる。			ガス状物質と粒子状物質の性質や体積基準と重量基準の単位、ガス状物質の除去操作、ヘンリーの法則、溶解度、気液平衡及び吸収操作及び粒子状物質の性状や集じん処理操作を説明できる。		ガス状物質と粒子状物質の性質や体積基準と重量基準の単位、ガス状物質の除去操作、ヘンリーの法則、溶解度、気液平衡及び吸収操作及び粒子状物質の性状や集じん処理操作も説明できない。	
評価項目5 廃棄物の性状、分類および処理・処分のゴミ焼却、最終処分、焼却処理の中間処理としての特性及び焼却灰等に含まれるダイオキシンの分類、性質や毒性等について説明できる。	廃棄物の性状、分類および処理・処分のゴミ焼却、最終処分、焼却処理の中間処理としての特性及び焼却灰等に含まれるダイオキシンの分類、性質や毒性等と共に、廃棄物の社会的問題についても説明できる。			廃棄物の性状、分類および処理・処分のゴミ焼却、最終処分、焼却処理の中間処理としての特性及び焼却灰等に含まれるダイオキシンの分類、性質や毒性等について説明できる。		廃棄物の性状、分類および処理・処分のゴミ焼却、最終処分、焼却処理の中間処理としての特性及び焼却灰等に含まれるダイオキシンの分類、性質や毒性等についても説明できない。	
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	本科目は、環境問題に関する概論的内容を含め、地球温暖化等の環境への影響メカニズムやプロセスおよび公害等について述べる。また、大気汚染および水質汚濁等の環境保全技術（汚染物質の除去（防止）技術のプロセス）と廃棄物について説明する。						
授業の進め方・方法	原則として環境プロセス工学に必要な基礎的技術に関する講義を進めていくが、これらに必要な法則・手法に関する基礎工学についても述べる。その他、環境に関する理解を深めるため、資料（プリント）等を用い説明を行う。また、期末試験以外に中間試験や小テストを行い、レポート等の提出も課する。						
注意点	講義の内容をよく理解するために、毎回、教科書等を参考に2時間程度の予習をし、授業時間での質問等に対応できるようにしておくこと。また、講義終了後は、復習として2時間程度の演習問題等の課題に取り組むこと。疑問点があれば、その都度質問すること。						
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
後期	3rdQ	1週	地球環境問題及び地球温暖化		序論として、環境汚染メカニズムと汚染防止プロセスの関連について説明できる。地球温暖化の機構や二酸化炭素の排出規制について説明できる。		
		2週	酸性雨		酸性雨のメカニズム、酸性雨のpHが5.6以下であることを説明できる。		
		3週	オゾン層の破壊		オゾン層破壊のメカニズム、フロンとはどのような物質かを説明できる。		
		4週	環境計画		環境行政の歴史、現状等について説明できる。環境アセスメントの環境基本法や環境アセスメント法等について説明できる。生態系の保全と再生のための河川環境対策の具体的事例等について説明できる。		
		5週	水質汚濁の概要		水質汚濁の概要及び汚濁物（有機物（BOD）等）の分類や指標を説明できる。微生物処理操作における、好気性処理や活性汚泥法等を説明できる。		

		6週	化学反応の機構と速度及び化学反応操作	化学反応の機構と速度や、0次、1次および2次反応等について説明できる。化学反応操作における、回分および連続(槽型)操作を説明できる。
		7週	生物反応工学	生物反応工学について、酵素反応（ミカエリス・メンテンの式等）を説明できる。
		8週	中間試験	第1週から第7週の授業項目に対して達成度を確認する。
	4thQ	9週	大気汚染物質	ガス状物質と粒子状物質の性質や体積基準と重量基準の単位を説明できる。
		10週	大気汚染物質の除去操作	大気汚染物質(SOxやNOx)の除去操作である排煙脱硫と排煙脱硝等を説明できる。
		11週	ガス状物質	ガス状物質のヘンリーの法則、溶解度、気液平衡及び吸収操作について説明できる。
		12週	粒子状物質	ばいじんと粉じんの性状や集じん処理操作（重力沈降等）を説明できる。
		13週	廃棄物の分類及び処理・処分	廃棄物の性状、分類および処理・処分のゴミ焼却、最終処分（産廃）やゼロエミッション（回収、再利用）等について説明できる。
		14週	中間処理とダイオキシン	焼却処理について、中間処理としての特性を説明できる。焼却灰等に含まれるダイオキシンの分類、性質や毒性等について説明できる。
		15週	定期試験	第9週から第14週の授業項目に対して達成度を確認する。
		16週		

評価割合							
	試験	発表	相互評価	態度	ポートフォリオ	その他	合計
総合評価割合	80	0	0	0	0	20	100
基礎的能力	80	0	0	0	0	20	100
専門的能力	0	0	0	0	0	0	0
分野横断的能力	0	0	0	0	0	0	0

鹿児島工業高等専門学校		開講年度	平成29年度 (2017年度)		授業科目	ベクトル解析
科目基礎情報						
科目番号	0018		科目区分	専門 / 選択		
授業形態	講義		単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	電気情報システム工学専攻		対象学年	専1		
開設期	後期		週時間数	2		
教科書/教材	教科書：「新応用数学」高遠節夫ほか著，大日本図書。参考書・補助教材：「新応用数学 問題集」高遠節夫ほか著，大日本図書。					
担当教員	松浦 将國					
到達目標						
1. ベクトルの和，差，スカラー倍，位置ベクトル，ベクトルの成分，内積，外積の定義を式で説明できる（復習）。 2. ベクトルの微分が説明できる。 3. 接線ベクトルを用いて空間上の曲線の長さが計算できる。 4. 法線ベクトルを用いて空間上の曲面の面積が計算できる。 5. スカラー場の定義が説明でき，勾配を求めることができる。 6. 発散，回転を求めることができる。 7. スカラー場とベクトル場に対してそれぞれ線積分を計算できる。 8. グリーンの定理を説明できる。 9. スカラー場とベクトル場に対してそれぞれ面積分を計算できる。 10. ガウスの発散定理とストークスの定理が説明できる。						
ルーブリック						
		理想的な到達レベルの目安	標準的な到達レベルの目安	未到達レベルの目安		
評価項目1		ベクトルの和，差，スカラー倍，内積，外積などの計算問題をほとんど解くことができ，これらに関連した公式の導出も概ね自力でできる。	ベクトルの和，差，スカラー倍，内積，外積などの計算問題を概ね解くことができ，これらに関連した公式の意味も説明できる。	ベクトルの和，差，スカラー倍，内積，外積などの計算問題をほとんど解くことができない。		
評価項目2		ベクトルの微分に関する計算問題をほとんど解くことができ，内積や外積を組み合わせた種々の公式の導出もできる。	ベクトルの微分の定義を概ね正しく答えられて，ベクトルの微分に関する計算問題を概ね解くことができる。	ベクトルの微分の定義をあまり答えられず，ベクトルの微分に関する計算問題をほとんど解くことができない。		
評価項目3		曲線の長さの公式に関する計算問題をほとんど解くことができ，曲線の長さの公式の導出もできる。	曲線の長さの公式を利用して，空間上の具体的な曲線の長さを求める問題を概ね正しく計算できる。	曲線の公式の意味を説明できず，それを利用して空間上の曲線の長さを計算することもほとんどできない。		
評価項目4		単位法線ベクトルを用いた曲面の面積公式を証明し，様々なアプローチにより具体的曲面の面積計算ができる。	単位法線ベクトルを用いた曲面の面積公式を利用して，具体的曲面の面積計算ができる。	曲面の面積公式をほとんど説明できず，具体的曲面の面積計算もほとんどできない。		
評価項目5		ナブラの線形性に関する公式の証明ができ，具体的なスカラー場に対して勾配を計算することができる。	ナブラの線形性をおおむね説明でき，具体的なスカラー場に対して勾配を計算することができる。	ナブラの線形性をほとんど説明できず，具体的スカラー場に対する勾配の計算もほとんどできない。		
評価項目6		具体的なベクトル場に対して発散と回転を計算でき，発散と回転に関する公式を概ね自力で証明できる。	ベクトル場の発散と回転の違いをナブラにより説明でき，具体的なベクトル場に対して発散と回転を計算できる。	ベクトル場の発散と回転の違いを説明できず，具体的なベクトル場に対して発散と回転を計算することができない。		
評価項目7		スカラー場やベクトル場の具体的な計算ができ，それらの線積分の定義も概ね正しく説明できる。	具体的なスカラー場やベクトル場に対し，与えられた具体的閉曲線について線積分を概ね正しく計算することができる。	与えられたスカラー場やベクトル場の線積分の定義を説明できず，これらの具体的計算もほとんどできない。		
評価項目8		グリーンの定理を応用した計算問題を解くことができ，グリーンの定理の証明もできる。	グリーンの定理を応用して具体的な線積分の計算問題を解くことができる。	グリーンの定理の内容をまったく説明できず，線積分の計算問題に應用することもできない。		
評価項目9		具体的なスカラー場やベクトル場に対して面積分の計算ができ，面積分の公式の証明の概要も説明できる。	面積分の公式を応用して，具体的なスカラー場やベクトル場に対して面積分を計算することができる。	面積分の公式の内容をまったく説明できず，具体的なスカラー場やベクトル場に対して面積分を計算することができない。		
評価項目10		ガウスの発散定理やストークスの定理の概要を説明でき，様々な数理的モデルに應用できる。	ガウスの発散定理やストークスの定理の概要を具体的なモデルに即して説明できる。	ガウスの発散定理やストークスの定理の概要をまったく説明できない。		
学科の到達目標項目との関係						
教育方法等						
概要	ベクトルに関する微積分を具体的な計算問題に即して習得し，物理学や工学等に應用することを目標とする。本科目は物理学や工学等でよく取り扱われる重要な科目である。					
授業の進め方・方法	おもにベクトルの微分，勾配・発散・回転の計算法，ベクトル場／スカラー場での線積分や面積分を学習する。本科目は学生の予習を前提に行われる。					
注意点	各回授業前に予習を済ませ，教科書内の用語の意味や具体例を把握し，例題も解いておくこと。教科書や問題集などで問題を解き，具体的な問題の解法を習得すること。不明な点は必ず担当教員に質問すること					
授業計画						
		週	授業内容	週ごとの到達目標		
後期	3rdQ	1週	ベクトルと内積・外積	ベクトルの和，差，スカラー倍，位置ベクトル，ベクトルの成分，内積，外積の定義を式で説明できる（復習）。		
		2週	ベクトルの微分	ベクトルの微分が説明できる。		
		3週	曲線と曲面	接線ベクトルを用いて空間上の曲線の長さが計算できる。		

		4週	曲線と曲面	法線ベクトルを用いて空間上の曲面の面積が計算できる.
		5週	スカラー場とベクトル場	スカラー場の定義が説明でき, 勾配を求めることができる.
		6週	スカラー場とベクトル場	発散, 回転を求めることができる.
		7週	スカラー場とベクトル場	発散, 回転を求めることができる.
		8週	線積分	スカラー場とベクトル場に対してそれぞれ線積分を計算できる.
	4thQ	9週	線積分	スカラー場とベクトル場に対してそれぞれ線積分を計算できる.
		10週	線積分	グリーンの定理を説明できる.
		11週	線積分	スカラー場とベクトル場に対してそれぞれ面積分を計算できる.
		12週	線積分	スカラー場とベクトル場に対してそれぞれ面積分を計算できる.
		13週	線積分	ガウスの発散定理とストークスの定理が説明できる.
		14週	線積分	ガウスの発散定理とストークスの定理が説明できる.
		15週	期末試験	上記項目に対して到達度を確認する.
		16週		

評価割合

	試験	平常点	合計
総合評価割合	75	25	100
能力	75	25	100

鹿児島工業高等専門学校		開講年度	平成29年度 (2017年度)		授業科目	線形代数学
科目基礎情報						
科目番号	0019		科目区分	専門 / 選択		
授業形態	講義		単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	電気情報システム工学専攻		対象学年	専1		
開設期	前期		週時間数	2		
教科書/教材	テキスト 線形代数 小寺平治著 共立出版／大学編入のための数学問題集 碓氷久他著 大日本図書					
担当教員	嶋根 紀仁					
到達目標						
(1) ベクトル空間と線形写像への理解を深める (2) 固有値・固有ベクトルへの理解を深め、行列の対角化・三角化とその応用を行う						
ルーブリック						
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
行列の対角化	行列の対角化を問題解決に利用できる。		行列の対角化とその簡単な応用ができる。 エルミート行列をユニタリー行列によって対角化できる。		行列の固有値・固有ベクトルを求めることができない。 複素ベクトルの内積を求めることができない。	
行列の三角化	行列の三角化を問題解決に利用できる。		行列の三角化ができる。 2次行列のジョルダン標準形を求めることができる。 指数行列を用いて、簡単な線形微分方程式を解くことができる。		行列の対角化や三角化ができない。	
学科の到達目標項目との関係						
教育方法等						
概要	(1) 鹿児島高専準学士課程で履修した線形代数の知識を前提とする (2) 線形代数の概念と演算は理工系学問の基礎として多くの分野で利用されている					
授業の進め方・方法	ベクトルと行列・行列式において線形代数の復習、ベクトル空間と線形写像において複素計量ベクトル空間とユニタリー変換の導入、固有値問題において行列の対角化と三角化およびその基本的な応用を講義形式で行う					
注意点	(1) 予習として既習内容を確認しておくこと (2) 復習により要点をつかみ基礎概念、演算方法を理解すること (3) 自学自習として各自のレベルにあった問題を解くことにより、基礎概念の理解だけでなく、演算方法の定着をはかること					
授業計画						
		週	授業内容		週ごとの到達目標	
前期	1stQ	1週	ベクトルと行列・行列式		空間内のベクトルの問題を解くことができる	
		2週	同上		行列・行列式の問題を解くことができる	
		3週	ベクトル空間と線形写像		ベクトル空間とその基底や次元が理解できる	
		4週	同上		線形写像とその表現行列が理解できる	
		5週	同上		内積空間が理解できる 複素ベクトルの内積を求めることができる	
		6週	同上		ユニタリー変換の意味が理解できる	
		7週	固有値問題		行列の固有値・固有ベクトルを求めることができる	
		8週	同上		行列の対角化とその簡単な応用ができる	
	2ndQ	9週	同上		行列の三角化ができる	
		10週	同上		正規行列の対角化ができる	
		11週	同上		エルミート行列をユニタリー行列によって対角化できる	
		12週	同上		2次行列のジョルダン標準形を求めることができる	
		13週	同上		指数行列を用いて、簡単な線形微分方程式を解くことができる	
		14週	同上		同上	
		15週	期末試験		固有値問題について達成度を確認する	
		16週	答案返却		試験において、間違えた部分を自分の課題として把握する	
評価割合						
		試験		合計		
総合評価割合		100		100		
期末試験		100		100		

鹿児島工業高等専門学校		開講年度	平成29年度 (2017年度)		授業科目	地球物理学概論	
科目基礎情報							
科目番号	0020			科目区分	専門 / 選択		
授業形態	講義			単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	電気情報システム工学専攻			対象学年	専1		
開設期	後期			週時間数	2		
教科書/教材							
担当教員	池田 昭大						
到達目標							
1. 地球の質量、体積、重力等、地球の概要を表す物理量を算出できる。 2. 地球の内部構造、放射性年代測定の仕組み、地磁気の成因について説明できる。 3. 太陽放射のエネルギーについて理解し、太陽定数を用いた太陽放射の計算ができる。 4. 地球磁気圏、電離圏の成因、構造について説明できる。 5. 地球の熱圏、中間圏、成層圏、対流圏の特徴を説明できる。 6. 地球温暖化について説明できる。							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安			標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1	地球の質量、体積、重力等、地球の概要を表す物理量を算出でき、算出に用いる式の意味が説明できる。			地球の質量、体積、重力等、地球の概要を表す物理量を算出できる。		地球の質量、体積、重力等、地球の概要を表す物理量を算出することができない。	
評価項目2	地球の内部構造、放射性年代測定の仕組み、地磁気の成因について説明でき、これらと関連する数式を扱うことができる。			地球の内部構造、放射性年代測定の仕組み、地磁気の成因について説明できる。		地球の内部構造、放射性年代測定の仕組み、地磁気の成因について説明できない。	
評価項目3	太陽放射のエネルギーについて理解し、太陽定数を用いた太陽放射の計算ができ、シュテファン・ボルツマンの法則を説明できる。			太陽放射のエネルギーについて理解し、太陽定数を用いた太陽放射の計算ができる。		太陽放射のエネルギーについて理解し、太陽定数を用いた太陽放射の計算ができない。	
評価項目4	地球磁気圏、電離圏の成因、構造について説明でき、スケールハイトの計算ができる。			地球磁気圏、電離圏の成因、構造について説明できる。		地球磁気圏、電離圏の成因、構造について説明できない。	
評価項目5	地球の熱圏、中間圏、成層圏、対流圏の特徴を説明でき、これらの領域の成因について数式、化学式等を用いて説明できる。			地球の熱圏、中間圏、成層圏、対流圏の特徴を説明できる。		地球の熱圏、中間圏、成層圏、対流圏の特徴を説明できない。	
評価項目6	地球温暖化について、アルベドを用いた計算から説明できる。			地球温暖化について説明できる。		地球温暖化について説明できない。	
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	あらゆる人間活動の基盤である地球の過去と現状について、科学的に理解するための基礎的事項を学習する。本科で学習した物理や微積分の基本事項は一通り理解できていることを前提に、地球を対象とする諸現象に対し、これらを応用する。						
授業の進め方・方法	講義形式で進める。						
注意点	教材として資料を適宜配布し、毎回小テスト、またはレポート提出を実施する。必要に応じ、ビデオ映像の視聴を行う						
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
後期	3rdQ	1週	地球の大きさと形		地球の質量、体積などを算出できる。		
		2週	回転楕円体地球		重力と遠心力について説明できる。		
		3週	走時曲線		走時曲線を説明できる。		
		4週	地球の内部構造		地球の内部構造を説明できる。		
		5週	地球の年齢		地球の年齢の推定方法を説明できる。		
		6週	プレートテクトニクス		アイソスタシー、プレートテクトニクスを説明できる。		
		7週	地磁気		地磁気の成因を説明できる。		
		8週	太陽活動と地球		太陽の構造、放射、活動について説明できる。		
	4thQ	9週	磁気圏		地球磁気圏の構造を説明できる。		
		10週	電離圏		電離圏の成因を説明できる。		
		11週	地球大気		地球大気の構造を説明できる。		
		12週	地球温暖化		地球の温暖化の仕組みを説明できる。		
		13週	地球環境		地球の環境破壊について説明できる。		
		14週	磁気嵐		磁気嵐について説明できる。		
		15週	試験				
		16週					
評価割合							
	試験	発表	相互評価	態度	ポートフォリオ	その他	合計
総合評価割合	70	0	0	0	0	30	100
基礎的能力	20	0	0	0	0	15	35
専門的能力	35	0	0	0	0	15	50
分野横断的能力	15	0	0	0	0	0	15

鹿児島工業高等専門学校		開講年度	平成29年度 (2017年度)		授業科目	応用電子計測
科目基礎情報						
科目番号	0022		科目区分	専門 / 選択		
授業形態	講義		単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	電気情報システム工学専攻		対象学年	専1		
開設期	後期		週時間数	2		
教科書/教材	計測システム工学の基礎（第3版） 西原／山藤／松田 森北出版/確率統計（大日本図書）等の統計関係の教科書類、「トランジスタ技術」「インターフェース」（CQ出版）などの技術雑誌の記事等。					
担当教員	寺師 裕人					
到達目標						
1. データの統計的処理の方法 2. データを可視可と予測 3. データのセンシングと処理						
ルーブリック						
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1	記述統計とその発展形である推測統計を理解し計算機で解析できる。		データを用いて統計処理やt、F検定を用いその評価ができる。		データを用いて統計処理やt、F検定を用いその評価ができない。	
評価項目2	データを可視可する原理を理解し計算機で描画できる。		データを最小2乗法や補間法を用い可視化できその結果データの予測が可能になる。		データを最小2乗法や補間法を用い可視化できずその結果データの予測ができない。	
評価項目3	1ケでもよいからセンサを用いた応用回路を構築できる。		色々なセンサの信号検出原理が理解できその応用としてのアナログ処理の回路等の説明ができる。		色々なセンサの信号検出原理が理解できずその応用としてのアナログ処理の回路等の説明ができない。	
学科の到達目標項目との関係						
教育方法等						
概要	本講義は、3つの部分からなり、それぞれについての修得目標を以下のように設定する。 1. 計測の基本とデータ処理：誤差（ばらつき）の統計的な意味を理解し、差の有意性の判定（t検定）ができる。最小二乗法、補間法等の原理を理解し、実際の計測へ応用できる。 2. センサと信号計測：計測系を等価回路として解析し、インピーダンスや雑音についての問題点を理解できること。 3. 計測技術各論：半導体pHセンサやDNAセンサ等の最新のセンシング素子や、原子間力顕微鏡などの極微小計測システムの原理を理解する。					
授業の進め方・方法	データの統計的性質をもとに誤差の考え方やそのデータの推定を行う検定や分散分析の方法を学びデータを最小2乗法や色々な補間法で可視可する方法を、計算機を用いて学習する。そして信号データを検出する方法と検出した信号の処理方法も学ぶ。信号センサは多岐にわたるため色々な文献を参照されたい。					
注意点	データや誤差についての統計的理解のためには、実際に計算を行うことが必要である。データ処理の学習では実際にパソコンで表計算ソフト等を用いる演習課題を行う。このデータ処理に関する課題のほかに、授業内容に関する課題を提示するので、これらについては必ず自学自習によりレポートを作成して提出すること。					
授業計画						
		週	授業内容		週ごとの到達目標	
後期	3rdQ	1週	1. 計測の基本とデータ処理 1.1 計測の基本量と単位系		□ 物理量と工業量の関係、SI単位系の基本量と基準、組立て単位と基本単位の間接関係を理解し、単位間の換算ができる。	
		2週	1.2 計測器の精度と誤差		□ 誤差の種類、感度、分解能、確度、公差、許容差などの意味を理解し、誤差を予測できる。	
		3週	1.3 誤差と統計処理		□ 偶然誤差が正規分布に従う事を理解する。母集団と標本集団の関係を理解し、標本平均、不偏分散、標本標準偏差を計算できる。測定回数と誤差、ばらつきの関係を説明できる。	
		4週	1.4 検定と分散分析		□ 検定の意味、帰無仮説、棄却域等を理解し、標本の検定、t検定を実行できる。分散分析の概要を理解し、回帰直線・相関係数を計算できる。	
		5週	1.4 検定と分散分析		□ 検定の意味、帰無仮説、棄却域等を理解し、標本の検定、t検定を実行できる。分散分析の概要を理解し、回帰直線・相関係数を計算できる。	
		6週	1.5 最小二乗法と補間法		□ 最小二乗法の原理と解析的に適用できる理論式の範囲を解釈できる。ラグランジュの補間法、スプライン補間法の原理を説明できる。最小二乗法によるデータ処理を計算ソフトで利用できる。	
		7週	1.5 最小二乗法と補間法		□ 最小二乗法の原理と解析的に適用できる理論式の範囲を解釈できる。ラグランジュの補間法、スプライン補間法の原理を説明できる。最小二乗法によるデータ処理を計算ソフトで利用できる。	
		8週	2. センサと信号計測 2.1 各種センサの原理と特性		□ 長さ、速度、圧力等の代表的センサ、トランスデューサの原理を説明できる。熱電対、サーミスタ等の温度センサの原理とそれぞれの特徴を説明できる。半導体光センサの種類と特徴、応用分野を説明できる。	
	4thQ	9週	2.2 計測系の等価回路		□ センサ（信号源）と測定器（増幅器）の等価回路とインピーダンスによる誤差、変動信号を扱う場合の周波数特性について説明できる。	
		10週	2.3 アナログ信号処理と計測用増幅器		□ 電気信号増幅の原理と等価回路、電圧フォロフ回路、sa差動増幅器の原理と必要性、CMRRについて説明できる。	
		11週	2.4 雑音		□ 誘導雑音、熱雑音の意味と特徴について説明できる。配線による雑音と、基本的な雑音対策について説明できる。	

		12週	2.5 デジタル計測の概要	☐ 量子化と標本化、標本化定理、エイリアシング、フィルタの必要性を説明できる。
		13週	3. 計測技術各論 3.1 半導体pHセンサ、味センサ、酵素センサ、DNAセンサ等	☐ AD/DA変換器の種類と特徴について説明できる。 ☐ ISFETの原理とその応用、ならびに味センサの原理と概要について説明できる。
		14週	3.2 原子間力顕微鏡 (AFM)	☐ 原子レベルの形状測定を可能としている原理と技術について説明できる。
		15週	試験答案の返却・解説	試験において間違った部分を自分の課題として把握する（非評価項目）。
		16週		

評価割合							
	試験	発表	相互評価	態度	ポートフォリオ	その他	合計
総合評価割合	60	0	0	0	0	40	100
基礎的能力	60	0	0	0	0	40	100
専門的能力	0	0	0	0	0	0	0
分野横断的能力	0	0	0	0	0	0	0

鹿児島工業高等専門学校		開講年度	平成29年度 (2017年度)		授業科目	技術倫理
科目基礎情報						
科目番号	0042		科目区分	一般 / 必修		
授業形態	講義		単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	電気情報システム工学専攻		対象学年	専2		
開設期	後期		週時間数	2		
教科書/教材	無し。必要な教材は、授業中に適宜配布する。					
担当教員	町 泰樹					
到達目標						
1. 客観的立場に立ち、各種社会問題についてのサーベイおよび分析をしつつ、分かりやすいレポートが作成できる。 2. さまざまな業界が直面しうる倫理的問題について、前向きな解決法を提示できる。 3. 各種倫理思想に沿いつつ「人間」「社会」というものを多角的に理解・分析できる。						
ルーブリック						
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1	社会問題の実情と背景、各種問題の関連性について因果関係をきちんと分析し、それを分かりやすく示すことができた。		社会問題の実情およびその背景といった関連性・因果関係をきちんと理解することはできた。		社会問題の実情についてサーベイなどが不足し、理解できなかった。	
評価項目2	各分野の技術士の話をきちんと理解し、現代社会における解決の道筋について自分なりの解決策を具体的に提示できた。		各分野の技術士の話をきちんと理解し、おおまかな解決策の道筋を提示できた。		各分野の技術士の話を理解できず、問題の適切な解決へと議論が提示されなかった。	
評価項目3	「人間」についての多角的に理解のもと、その集合体である「社会」の特性を理解し、「より良い社会」についての積極的議論を展開できた。		「人間」を多角的に理解し、その集合体である「社会」の特性について理解することができた。		「人間」を一面的にしか理解できず、それゆえ「社会」の見方も一面的なものとなってしまった。	
学科の到達目標項目との関係						
教育方法等						
概要	科学技術発展の歴史を振り返るとき、科学技術はすべての人間に対して幸福をもたらしてくれたであろうか。あるいは、科学技術は地球環境（自然）との共存を果たしてきたであろうか。すべての科学技術者は、科学技術者である前に一人間としてこの地球上に存在する。人間は、地球という巨大な生命体の一部であるがゆえに、他の生命との共存を考えなければならない。また、人間社会において、ひとりひとりの人間は、他者を思いやる心を持ち、相手の立場に立つてもの考え、すべての人類の幸福を追求してゆかなければならない。そこで、本科目は、人間として不可欠な倫理観を身に付けること、すなわち、人間として、自然および社会に対して負う責任を自覚するとともに、科学技術と人間、自然との係わり合いを深く考え、人類の未来と自然との共存をデザインできる能力を身に付けることを主な目標とする。取り扱う事例の中には、地域の現状に関する内容も含まれる。					
授業の進め方・方法	担当教員および鹿児島県技術士会より招聘する各技術士（3名）が配布する資料等に沿って授業が進行する。単元が終わる毎にレポートを提出してもらう。					
注意点	講義内容をよく理解するために、毎回、教科書等を参考に2時間程度の予習をし、授業時間での質問等に対応できるようにしておくこと。また、講義終了後は、復習として2時間程度の演習問題等の課題に取り組むこと。疑問点があれば、その都度質問すること。					
授業計画						
		週	授業内容		週ごとの到達目標	
後期	3rdQ	1週	オリエンテーション 技術倫理総論（1）		「技術分野における倫理的判断とはどのようなものであるか」という観点のもと、いくつかの社会問題とその背景について理解できる。	
		2週	技術倫理総論（2）			
		3週	技術倫理総論（3）			
		4週	技術倫理総論（4）			
		5週	技術倫理総論（5）			
		6週	技術倫理各論（1） 社会に対する責任を自覚する技術者（建設土木業務における技術者倫理）		建設土木の実務を通して、技術者が社会に対して負う責任を理解することができる。	
		7週	技術倫理各論（1） 社会に対する責任を自覚する技術者（建設土木業務における技術者倫理）			
		8週	技術倫理各論（1） 社会に対する責任を自覚する技術者（建設土木業務における技術者倫理）			
	4thQ	9週	技術倫理各論（2） 農業土木業務における技術者倫理		農業土木の実務を通して、技術者が社会に対して負う責任を理解することができる。	
		10週	技術倫理各論（2） 農業土木業務における技術者倫理			
		11週	技術倫理各論（2） 農業土木業務における技術者倫理			
		12週	技術倫理各論（3） 森林土木業務における技術者倫理		森林土木の実務を通して、技術者が社会に対して負う責任を理解することができる。	
		13週	技術倫理各論（3） 森林土木業務における技術者倫理			
		14週	技術倫理各論（3） 森林土木業務における技術者倫理			
		15週	試験答案の返却・解説		各試験において間違えた部分を自分の課題として把握する（非評価項目）。	
		16週				

評価割合							
	試験	発表	相互評価	態度	ポートフォリオ	その他	合計
総合評価割合	35	20	0	0	0	45	100
基礎的能力	35	0	0	0	0	45	80
専門的能力	0	0	0	0	0	0	0
分野横断的能力	0	20	0	0	0	0	20

鹿児島工業高等専門学校		開講年度	平成29年度 (2017年度)		授業科目	論理的英語コミュニケーション
科目基礎情報						
科目番号	0043		科目区分	一般 / 選択		
授業形態	講義		単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	電気情報システム工学専攻		対象学年	専2		
開設期	前期		週時間数	2		
教科書/教材	なし 英和・和英辞書は既に購入しているものでよい					
担当教員	坂元 真理子					
到達目標						
英語での論理的コミュニケーション能力を、ブックレビューと演習形式のプレゼンテーション練習によって身に付ける。具体的には、読んだ英語の本について紹介するプレゼンテーションを行ったり、それについて英語で自分の意見を書いたり話したり、意見の交換を行ったりできるようにする。						
ルーブリック						
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
プレゼンテーションの技法について	自分または他者のプレゼンテーションの内容について理解し、その内容やそこから派生した話題について英語で議論することができる。		自分または他者のプレゼンテーションの内容について理解し、自分の考えをまとめて英語で記述したり発表したりできる。		自分で選択した題材についてのプレゼンテーションを行い、また他者のプレゼンテーションの内容を理解することができていない。	
洞察的思考能力について	講義内容や題材の中での論点について自分の意見や多角的な視点からの考えをまとめて英語で議論することができる。		講義内容や題材の中での論点について自分の意見や多角的な視点からの考えをまとめて英語で書いたり発表したりすることができる。		講義内容や題材についての論点を正しく理解し指摘することができない。	
英語を使った論理的なコミュニケーションについて	プレゼンテーションの技法や英語の論理性について科学技術英語で修得したことをもとに、論旨を論理的に組み立てたうえで発表や議論の中で英語で実践することができる。		プレゼンテーションの技法や英語の論理性について科学技術英語で修得したことを、自分のプレゼンテーションにあてはめ英語で実践することができる。		プレゼンテーションの技法や英語の論理性について科学技術英語で修得したことを、自分のプレゼンテーションにあてはめることができない。	
学科の到達目標項目との関係						
教育方法等						
概要	「科学技術英語」(1年次後期開講科目)の発展・応用レベル。したがって同科目を予め履修していることが望ましい。					
授業の進め方・方法	自宅で英語の本を1冊読み、授業ではあらかじめ決められた方法に基づいて作成した資料を基にプレゼンテーションを行う。また、発表の内容等に関し互いに質疑応答を行うほか、いくつかの点について議論したり、追加の情報についての説明を受けたりする。					
注意点	毎回提示される課題(予習・復習)に取り組み、学習内容の理解および洞察的思考能力を養うこと。英和・和英辞典持参のこと。与えられた課題に対し、自発的な姿勢で取り組むこと。物事について真面目に考えることが嫌いな学生や、人前で意見を述べたり他者と意見交換をしたりする活動が嫌いな学生の受講は勧めない。ディスカッション、プレゼンテーション等、人前で英語で自分の意見を述べる活動が多い。多量の英語教材を読む活動も多く行う。また、基本的に授業中の言語は英語を使用する。					
授業計画						
		週	授業内容	週ごとの到達目標		
前期	1stQ	1週	聞く	英語の指示を正しく聞き取ることができる。		
		2週	聞く	英語のプレゼンテーションを聞いて内容を正しく理解することができる。		
		3週	読む	英語の本を読み、内容について正しく理解することができる。		
		4週	読む	英語の資料を読み、内容を正しく理解することができる。		
		5週	読む	教材や資料の中から論旨や中心的となるテーマについて考えながら能動的な読みを行う事ができる。		
		6週	話す	与えられた課題の中から自ら選択した題材について口頭でプレゼンテーションを行うことができる。		
		7週	話す	題材について自分の考えを口頭で発表することができる。		
		8週	話す	他者の発表についての疑問点や自分の意見について英語で相手に伝えることができる。		
	2ndQ	9週	書く	与えられた課題の中から自ら選択した題材について簡潔にまとめて記述することができる。		
		10週	書く	題材についての事実や考えを英語で書くことができる。		
		11週	発表する	上記で培われた能力を総合的に使用し、事実やそれについての自分の考えを英語的な論理構成にしたがって展開し、発表することができる。		
		12週	発表する	発表を聞く人の立場に立ち、内容や論点が明解な発表を行う事ができる。		
		13週	議論する	教材の中で中心的となる問題やテーマについて考察し、問題を設定して発表することができる。		
		14週	議論する	上記で培われた能力を総合的に使用し、論旨を論理的に組み立て意見を交換することができる。		
		15週	期末試験	上記項目について達成度を評価する。		
		16週	試験答案の返却・解説	試験において間違った部分を自分の課題として把握する。(非評価項目)		

評価割合					
	試験	発表	レポート等	態度	合計
総合評価割合	50	40	10	0	100
目標到達度	50	40	10	0	100

鹿児島工業高等専門学校		開講年度	平成29年度 (2017年度)		授業科目	回路工学特論	
科目基礎情報							
科目番号	0029		科目区分		専門 / 選択		
授業形態	講義		単位の種別と単位数		学修単位: 2		
開設学科	電気情報システム工学専攻		対象学年		専2		
開設期	前期		週時間数		2		
教科書/教材	改訂版VHDLによるデジタル回路入門, 鈴木秀明他, 技術評論社						
担当教員	芝 浩二郎						
到達目標							
ルーブリック							
		理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1							
評価項目2							
評価項目3							
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要		現在, デジタル回路設計などのハードウェア設計は, ハードウェア記述言語を利用することが多い。したがって, 論理回路, 電子計算機の基礎的知識を基に, 基本的なデジタル回路をハードウェア記述言語で設計できる力を修得する。					
授業の進め方・方法							
注意点		論理回路, 電子計算機の基礎知識が必要である。また, ハードウェア記述言語 (VHDL) の修得のためには, プログラミング (C言語など) の基礎知識が必要である。なお, 本科目は, 指示内容について210分程度の自学自習 (予習・復習) が必要である。					
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
前期	1stQ	1週	1. 論理回路とデジタルIC		☐ ゲート回路の使い方を説明できる。 ☐ デジタル I C の使い方を説明できる。		
		2週	1. 論理回路とデジタルIC		☐ ゲート回路の使い方を説明できる。 ☐ デジタル I C の使い方を説明できる。		
		3週	2. ハードウェア記述言語		☐ ハードウェア記述言語 (VHDL) の概要を説明できる。 ☐ 基本論理回路をVHDLで記述できる。 ☐ 論理合成を実行できる。		
		4週	2. ハードウェア記述言語		☐ ハードウェア記述言語 (VHDL) の概要を説明できる。 ☐ 基本論理回路をVHDLで記述できる。 ☐ 論理合成を実行できる。		
		5週	2. ハードウェア記述言語		☐ ハードウェア記述言語 (VHDL) の概要を説明できる。 ☐ 基本論理回路をVHDLで記述できる。 ☐ 論理合成を実行できる。		
		6週	3. 組み合わせ回路の設計		☐ 選択回路, デコーダ, エンコーダ, 比較回路をVHDLで記述できる。		
		7週	3. 組み合わせ回路の設計		☐ 選択回路, デコーダ, エンコーダ, 比較回路をVHDLで記述できる。		
		8週	3. 組み合わせ回路の設計		☐ 選択回路, デコーダ, エンコーダ, 比較回路をVHDLで記述できる。		
	2ndQ	9週	4. フリップフロップとレジスタ		☐ D-FF, RS-FF, JK-FF, T-FFの動作を説明できる。 ☐ レジスタをVHDLで記述できる。		
		10週	4. フリップフロップとレジスタ		☐ D-FF, RS-FF, JK-FF, T-FFの動作を説明できる。 ☐ レジスタをVHDLで記述できる。		
		11週	4. フリップフロップとレジスタ		☐ D-FF, RS-FF, JK-FF, T-FFの動作を説明できる。 ☐ レジスタをVHDLで記述できる。		
		12週	5. 順序回路の設計		☐ 演算回路のVHDLによる設計, シミュレーション, および動作検証を行える。		
		13週	5. 順序回路の設計		☐ 演算回路のVHDLによる設計, シミュレーション, および動作検証を行える。		
		14週	5. 順序回路の設計		☐ 演算回路のVHDLによる設計, シミュレーション, および動作検証を行える。		
		15週	試験答案の返却・解説		試験において間違えた部分を自分の課題として把握する。(非評価項目)		
		16週					
評価割合							
	試験	発表	相互評価	態度	ポートフォリオ	その他	合計
総合評価割合	60	0	0	0	0	40	100
基礎的能力	0	0	0	0	0	0	0
専門的能力	60	0	0	(-20)	0	40	100
分野横断的能力	0	0	0	0	0	0	0

鹿児島工業高等専門学校		開講年度	平成29年度 (2017年度)		授業科目	応用代数学	
科目基礎情報							
科目番号	0034		科目区分		専門 / 選択		
授業形態	講義		単位の種別と単位数		学修単位: 2		
開設学科	電気情報システム工学専攻		対象学年		専2		
開設期	後期		週時間数		2		
教科書/教材	〔教科書〕 なし／〔参考書・補助教材〕 図書館の参考書類（整数論，暗号で検索），配布するプリント類						
担当教員	白坂 繁						
到達目標							
(1) 代数的な考え方・論理的な思考を修得すること。 (2) 具体的な計算処理に習熟すること。 (3) 抽象的な概念を理解し，応用できること。							
ルーブリック							
		理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1. 互除法を使用して、最大公約数を求めることができる。		互除法により、最大公約数を求め、更に一次不定方程式の一般解を求めることができる。		最大公約数・最小公倍数を理解し、互除法により、最大公約数を求めることができる。		互除法により、最大公約数を求めることができない。	
評価項目2. オイラー関数の値を求め、合同式が解ける。		合同式とオイラーの関数の値より、オイラーの定理の計算ができる。		合同式が解け、オイラーの関数の値を求めることができる。		合同式が解け、オイラーの関数の値を求めることができない。	
評価項目3. R S A暗号の基本的仕組みを理解できる。		R S A暗号の仕組みを理解し、暗号化・復号化の計算ができ、解読が困難なことを説明できる。		合同式を利用して、R S A暗号の仕組みを理解し、暗号化・復号化の計算ができる。		R S A暗号の暗号化・復号化の計算ができない。	
評価項目4. 群論の初歩と抽象的数学の考え方を理解できる。		群論を理解し、実際の問題に活用・適用できる。抽象的な記述・証明を理解できる。		群論の計算と、構造を理解し、簡単な群の説明ができる。		群の計算ができない。	
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要		(1) 本科までの論理的な考え方を前提とする。 (2) 本科目は，専門科目や将来の職業のための基礎科目として位置付けられる。					
授業の進め方・方法		講義・演習方式で行う					
注意点		(1) 集中すべきときに集中して要点をつかみ，理解すべきことを確実に理解すること。 (2) 講義内容をよりよく理解するために，毎回，教科書等を参考に2時間程度の予習をしておくこと。 (3) 課題等の演習問題で，2時間以上の反復練習をし，抽象的な思考に慣れること。 (4) 疑問点は，その都度，質問すること。					
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
後期	3rdQ	1週	1. 初等整数論		☐ ①最大公約数と最小公倍数との関係を理解できる。		
		2週	1. 初等整数論		☐ ②互除法により最大公約数 を求めることができる。		
		3週	1. 初等整数論		☐ ③互除法により，一次不定方程式 が解ける。		
		4週	2. 合同式		☐ ①合同式とその性質 を理解 できる。		
		5週	2. 合同式		☐ ②連立一次合同式 が解ける。		
		6週	2. 合同式		☐ ③オイラーの関数の値 を求めることができる。		
		7週	2. 合同式		☐ ③オイラーの関数の値 を求めることができる。		
		8週	2. 合同式		☐ ④オイラーの (小) 定理 の計算ができる。		
	4thQ	9週	3. R S A暗号		☐ ①公開鍵暗号の仕組み を理解できる。		
		10週	3. R S A暗号		☐ ②暗号化・復号化のアルゴリズム を理解できる。		
		11週	4. 群論		☐ ①群の定義とその例 を理解できる。 ☐ ②部分群の性質 を定義に基づいて理解できる。		
		12週	4. 群論		☐ ③正規部分群の性質 を定義に基づいて理解できる。		
		13週	4. 群論		☐ ④群の準同形定理 を理解できる。		
		14週	4. 群論		☐ ⑤群論を実際の問題 に応用できる。		
		15週	試験答案返却・解説		試験において、間違えた部分を自分の課題として把握する（非評価項目）。		
		16週					
評価割合							
	試験	発表	相互評価	態度	ポートフォリオ	その他	合計
総合評価割合	75	0	0	0	0	25	100
基礎的能力	75	0	0	0	0	25	100
専門的能力	0	0	0	0	0	0	0
分野横断的能力	0	0	0	0	0	0	0

鹿児島工業高等専門学校		開講年度	平成29年度 (2017年度)		授業科目	解析力学	
科目基礎情報							
科目番号	0035		科目区分		専門 / 選択		
授業形態	講義		単位の種別と単位数		学修単位: 2		
開設学科	電気情報システム工学専攻		対象学年		専2		
開設期	前期		週時間数		2		
教科書/教材	なし						
担当教員	篠原 学						
到達目標							
1. 仮想仕事の原理を用いて、釣り合いの問題について説明できる。 2. ラグランジアンを導き、ハミルトンの原理について説明できる。 3. 一般化運動量を用い、ハミルトニアン、ハミルトンの正準方程式について説明できる。							
ルーブリック							
		理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1		仮想仕事の原理にラグランジュの未定乗数方を用いて、釣り合いの問題を求めることができる。		仮想仕事の原理を説明し、釣り合いの問題を考えることができる。		仮想仕事の原理を説明することができない。	
評価項目2		ラグランジアンを求め、ハミルトンの原理を用いて運動の問題を求めることができる。		ラグランジアンを導き、ハミルトンの原理について説明できる。		ラグランジアン、ハミルトンの原理について説明できない。	
評価項目3		ハミルトニアン、ハミルトンの正準方程式を用いて運動の問題を求めることができる。		一般化運動量を用いた、ハミルトニアン、ハミルトンの正準方程式について説明できる。		ハミルトニアン、ハミルトンの正準方程式について説明できない。	
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要		「一般物理」あるいは「応用物理」で学んだNewton力学は、巨視的な世界における物体の振る舞いを記述するのに役立つ。一方、微視的な世界を理解するには量子力学を用いなければならない。これらの中間に位置する解析的な力学の取り扱いに慣れる。					
授業の進め方・方法		講義形式で行い、演習を行って学習内容を確認する。					
注意点		物体(質点)の運動を調べるのに、Newton力学ではベクトル量である【力】に注目したのに対し、解析力学ではスカラー量である【エネルギー】に注目する。					
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
前期	1stQ	1週	物体の運動		Newtonの運動方程式、そして束縛運動について説明できる。		
		2週	物体の運動		「仕事とエネルギーの関係」「エネルギー保存則」「保存力とポテンシャルとの関連」について説明できる。		
		3週	物体の運動		「仕事とエネルギーの関係」「エネルギー保存則」「保存力とポテンシャルとの関連」について説明できる。		
		4週	物体の運動		直交座標を含めた一般化座標について説明できる。		
		5週	仮想仕事の原理		仮想仕事の原理を用いて、「釣り合いの問題」について説明できる。		
		6週	仮想仕事の原理		仮想仕事の原理を用いて、「釣り合いの問題」について説明できる。		
		7週	ダランベールの原理		「慣性抵抗」は「加えられた力」の中間に入れられることについて説明できる。		
		8週	ダランベールの原理		「慣性抵抗」は「加えられた力」の中間に入れられることについて説明できる。		
	2ndQ	9週	ハミルトンの原理		ラグランジアンを導き、物体の運動を「ハミルトンの原理」で説明できる。		
		10週	ハミルトンの原理		ラグランジアンを導き、物体の運動を「ハミルトンの原理」で説明できる。		
		11週	ラグランジュの運動方程式		一般化座標を用いてラグランジアンを導き、ラグランジュの運動方程式を立てることができる。		
		12週	ラグランジュの運動方程式		一般化座標を用いてラグランジアンを導き、ラグランジュの運動方程式を立てることができる。		
		13週	ハミルトンの正準運動方程式		一般化運動量を用いてハミルトンの正準運動方程式を立てることができる。		
		14週	ハミルトンの正準運動方程式		一般化運動量を用いてハミルトンの正準運動方程式を立てることができる。		
		15週	定期試験				
		16週					
評価割合							
	試験	発表	相互評価	態度	ポートフォリオ	その他	合計
総合評価割合	70	0	0	0	0	30	100
基礎的能力	0	0	0	0	0	0	0
専門的能力	70	0	0	0	0	30	100
分野横断的能力	0	0	0	0	0	0	0

鹿児島工業高等専門学校		開講年度	平成29年度 (2017年度)		授業科目	量子力学	
科目基礎情報							
科目番号	0036			科目区分	専門 / 選択		
授業形態	講義			単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	電気情報システム工学専攻			対象学年	専2		
開設期	後期			週時間数	2		
教科書/教材	なし						
担当教員	野澤 宏大						
到達目標							
1. 前期量子論を理解できる。 2. シュレーディンガー方程式を適用することができる。 3. 不確定性原理と交換関係を理解できる。							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安			標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1	量子条件・振動数条件を理解できる。			水素原子モデルを理解できる。 古典力学的な軌道運動との違いを理解できる。		水素のスペクトルをリュードベリ定数を用いて説明できない。	
評価項目2	ポテンシャル問題を解くためにシュレーディンガー方程式を適用できる。			時間を含まないシュレーディンガー方程式、時間を含むシュレーディンガー方程式を立てることができる。		運動量、エネルギー、ハミルトニアンを演算子表記することができない。	
評価項目3	位置と運動量、時間とエネルギーを同時に正確に求めることはできないことを説明できる。			交換子の演算から、交換可能であるか否かを判断できる。		交換子の計算ができない。	
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	電子、原子レベルの現象解明に対する量子力学の必要性を理解する。そして、「シュレーディンガー方程式」の量子井戸への適応と、「不確定性原理」と「交換関係」の取り扱いについて学習する。量子力学の入門程度の内容であるが、本科で学習した応用物理・微積分の基礎的事項は一通り理解していることを前提とする。						
授業の進め方・方法	講義形式で進める。						
注意点	講義で展開される数式は自ら確認する必要がある。また学習内容を定着させるために、例題や練習問題を数多く解く。						
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
後期	3rdQ	1週	前期量子論		原子スペクトルの「離散性」や「光電効果」と「Compton効果」から、『光の粒子性』を説明できる。		
		2週	前期量子論		原子スペクトルの「離散性」や「光電効果」と「Compton効果」から、『光の粒子性』を説明できる。		
		3週	前期量子論		電子線回折を通して『電子の波動性』を説明できる。		
		4週	前期量子論		水素原子のエネルギー準位について説明できる。		
		5週	シュレーディンガー方程式		古典力学における弦の固有振動との対応から、物質波をもつ粒子の運動に伴う固有値と固有関数を説明できる。		
		6週	シュレーディンガー方程式		運動量を演算子化することにより、その固有値と固有関数を説明できる。		
		7週	シュレーディンガー方程式		エネルギーを固有値とするハミルトニアン(演算子)に対する固有値方程式シュレーディンガー方程式を、無限深さの1次元井戸型ポテンシャルに適応し、波動関数を求めることができる。さらに、この波動関数の規格直交化を説明できる。		
		8週	シュレーディンガー方程式		エネルギーを固有値とするハミルトニアン(演算子)に対する固有値方程式シュレーディンガー方程式を、無限深さの1次元井戸型ポテンシャルに適応し、波動関数を求めることができる。さらに、この波動関数の規格直交化を説明できる。		
	4thQ	9週	シュレーディンガー方程式		エネルギーを固有値とするハミルトニアン(演算子)に対する固有値方程式シュレーディンガー方程式を、無限深さの1次元井戸型ポテンシャルに適応し、波動関数を求めることができる。さらに、この波動関数の規格直交化を説明できる。		
		10週	シュレーディンガー方程式		有限深さの量子井戸では、波動関数の浸み出し効果(トンネル効果)があることが説明できる。		
		11週	不確定原理と交換関係		電子の「位置」と「運動量」を同時に定められないことを説明できる。		
		12週	不確定原理と交換関係		交換関係が『0』でない2つの演算子(例えば「位置」と「運動量」あるいは「時間」と「エネルギー」)の間には、不確定原理が成立することが説明できる。		
		13週	不確定原理と交換関係		交換関係が『0』でない2つの演算子(例えば「位置」と「運動量」あるいは「時間」と「エネルギー」)の間には、不確定原理が成立することが説明できる。		
		14週	まとめ				
		15週	期末試験				
		16週					
評価割合							
	試験	発表	相互評価	態度	ポートフォリオ	その他	合計

総合評価割合	70	0	0	0	0	30	100
基礎的能力	35	0	0	0	0	20	55
専門的能力	25	0	0	0	0	5	30
分野横断的能力	10	0	0	0	0	5	15

鹿児島工業高等専門学校		開講年度	平成29年度 (2017年度)		授業科目	精密加工学
科目基礎情報						
科目番号	0038		科目区分	専門 / 選択		
授業形態	講義		単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	電気情報システム工学専攻		対象学年	専2		
開設期	後期		週時間数	2		
教科書/教材	超精密加工学 丸井悦男著 コロナ社/新版機械加工 中山一雄, 上原邦雄著 朝倉書店					
担当教員	大淵 慶史					
到達目標						
ルーブリック						
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1						
評価項目2						
評価項目3						
学科の到達目標項目との関係						
教育方法等						
概要	コンピュータの高精度化の発展を支えてきたのはデジタルメディアの大容量の記憶媒体の開発であり, それには表面加工の粗さの微小化が可能な精密加工技術が不可欠である. 本科目では加工技術や測定技術を含む精密加工について評価できる.					
授業の進め方・方法						
注意点	本科での機械工作法および機械工作実習における総合的な理解が必要とされる. また工業英語の学習も兼ねて専門用語はなるべく英字で書けるように努める. 毎回, 教科書等を参考に2時間程度の予習をし, 授業時間での質問等に対応できるようにしていること. また, 講義終了後は, 復習として2時間程度の演習課題等の課題に取り組むこと. 疑問点があれば, その都度質問すること.					
授業計画						
		週	授業内容	週ごとの到達目標		
後期	3rdQ	1週	1. 精密加工の背景	☐ 工作機械の歴史について理解し, 説明できる. ☐ 精密加工法の種類について理解し, 説明できる. ☐ 精密加工システムの技術的な基礎について理解し, 説明できる.		
		2週	2. 精密加工機	☐ 精密加工機の構造について理解し, 説明できる. ☐ 精密加工機の構成要素について理解し, 説明できる. ☐ 精密加工機の主軸系について理解し, 説明できる. ☐ 精密加工機の送り系について理解し, 説明できる. ☐ 微小切り込み装置について理解し, 説明できる. ☐ 作業環境について理解し, 説明できる.		
		3週	2. 精密加工機	☐ 精密加工機の構造について理解し, 説明できる. ☐ 精密加工機の構成要素について理解し, 説明できる. ☐ 精密加工機の主軸系について理解し, 説明できる. ☐ 精密加工機の送り系について理解し, 説明できる. ☐ 微小切り込み装置について理解し, 説明できる. ☐ 作業環境について理解し, 説明できる.		
		4週	2. 精密加工機	☐ 精密加工機の構造について理解し, 説明できる. ☐ 精密加工機の構成要素について理解し, 説明できる. ☐ 精密加工機の主軸系について理解し, 説明できる. ☐ 精密加工機の送り系について理解し, 説明できる. ☐ 微小切り込み装置について理解し, 説明できる. ☐ 作業環境について理解し, 説明できる.		
		5週	3. 精密加工用の工具	☐ 精密切削のメカニズムについて理解し, 説明できる. ☐ 精密切削に必要な工具性質について理解し, 説明できる. ☐ 精密切削の工具として使用される材質について理解し, 説明できる.		
		6週	3. 精密加工用の工具	☐ 精密切削のメカニズムについて理解し, 説明できる. ☐ 精密切削に必要な工具性質について理解し, 説明できる. ☐ 精密切削の工具として使用される材質について理解し, 説明できる.		
		7週	4. 超精密切削機構	☐ 超精密切削加工に用いられる工具の切れ刃について理解し, 説明できる. ☐ ダイヤモンドバイトによる仕上げ面の生成について理解し, 説明できる. ☐ 球面および非球面加工について理解し, 説明できる. ☐ 鏡面加工について理解し, 説明できる. ☐ ダイヤモンド工具の損傷について理解し, 説明できる.		

		8週	4．超精密切削機構	☐ 超精密切削加工に用いられる工具の切れ刃について理解し，説明できる。 ☐ ダイヤモンドバイトによる仕上げ面の生成について理解し，説明できる。 ☐ 球面および非球面加工について理解し，説明できる。 ☐ 鏡面加工について理解し，説明できる。 ☐ ダイヤモンド工具の損傷について理解し，説明できる。
	4thQ	9週	5．超精密研削機構	☐ E L I D研削について理解し，説明できる。 ☐ ラッピングについて理解し，説明できる。 ☐ ポリシングについて理解し，説明できる。 ☐ メカノケミカルポリシングについて理解し，説明できる。
		10週	5．超精密研削機構	☐ E L I D研削について理解し，説明できる。 ☐ ラッピングについて理解し，説明できる。 ☐ ポリシングについて理解し，説明できる。 ☐ メカノケミカルポリシングについて理解し，説明できる。
		11週	6．測定技術	☐ 形状および位置の公差について理解し，説明できる。 ☐ 光学測定器による超精密測定について理解し，説明できる。
		12週	6．測定技術	☐ 形状および位置の公差について理解し，説明できる。 ☐ 光学測定器による超精密測定について理解し，説明できる。
		13週	7．表面粗さの評価	☐ 表面粗さの表示と規格について理解し，説明できる。
		14週	7．表面粗さの評価	☐ 表面粗さの表示と規格について理解し，説明できる。
		15週	試験答案の返却・解説	試験において間違った部分を自分の課題として把握する（非評価項目）。
		16週		

評価割合							
	試験	発表	相互評価	態度	ポートフォリオ	その他	合計
総合評価割合	50	0	0	0	0	50	100
基礎的能力	0	0	0	0	0	0	0
専門的能力	50	0	0	(-10)	0	50	100
分野横断的能力	0	0	0	0	0	0	0

鹿児島工業高等専門学校		開講年度	平成29年度 (2017年度)	授業科目	安全衛生工学
科目基礎情報					
科目番号	0039		科目区分	専門 / 選択	
授業形態	講義		単位の種別と単位数	学修単位: 2	
開設学科	電気情報システム工学専攻		対象学年	専2	
開設期	前期		週時間数	2	
教科書/教材	プリントを適宜配布する。/衛生管理－第1種用－上 中央労働災害防止協会編, 衛生管理－第1種用－下 中央労働災害防止協会編,				
担当教員	寄村 和広				
到達目標					
1. 労働安全衛生法等で、事業者が行う安全配慮義務とは何かを説明できる。又、不安全行動・不安全状態及びフールプルーフ及びフェールセーフの意味を理解し、説明できる。 2. ハインリッヒの法則を説明できる。そして、ヒヤリハット活動との関係を説明できる。 3. リスクアセスメントの意義・進め方を説明できる。 4. 危険予知訓練の意義・進め方を説明できる。 5. 労働安全衛生法、労働安全衛生規則、労働基準法の目的及びその概要を説明できる。又、労働安全衛生マネジメントシステムの概要を説明できる。 6. 労働安全衛生法の安全衛生管理体制の内容を説明できる。又、作業環境管理と職業性疾病との関係を説明できる。 7. 製造物責任法(PL法)の説明ができる。					
ルーブリック					
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安
評価項目1	標準的な到達レベルに加えて、以下のことができる。 1) 安全配慮義務と事業者責任の関係を具体的な例で説明できる。 2) 不安全行動と不安全状態を無くするための対策が説明できる。 3) フールプルーフとフェールセーフの具体的な事例を示し説明できる。		1) 労働安全衛生法で要求している安全配慮義務とは、どんなものか概要を説明できる。 2) 不安全行動とは、どんな行動を意味するのか説明できる。 3) 不安全状態とは、どんな状態を意味するものか説明できる。 4) フールプルーフの意味を理解し、説明できる。 5) フェールセーフの意味を理解し、説明できる。		労働安全衛生法の目的が理解できていない。又、不安全行動、不安全状態、フールプルーフ、フェールセーフの意味が理解できていない。
評価項目2	標準的な到達レベルに加えて、以下のことができる。 1) ハインリッヒの法則を応用した安全活動が説明できる。 2) ヒヤリハット活動が事業活動以外で活用されている事例を説明できる。		1) ハインリッヒの1:29:300法則が説明できる。 2) ヒヤリハットとは、どんな状態のものであるか説明できる。 3) ヒヤリハット活動がハインリッヒの法則と関連していることが説明できる。又、ヒヤリハット活動の目的が説明できる。		ハインリッヒの法則が、「重傷災害1件の背後に29件の軽傷、300件のヒヤリハットが起きていた。」とする内容であることを理解できていない。
評価項目3	標準的な到達レベルに加えて、以下のことができる。 1) リスクアセスメントの「危険性又は有害性」の意味を具体的に説明できる。 2) リスクアセスメントを進めるための基本的な手順を説明できる。		1) リスクアセスメントが法の要求事項(努力義務)であることが説明できる。 2) リスクアセスメントが何故必要なのかを説明できる。又、リスクアセスメントの進め方を説明できる。		リスクアセスメントが安全衛生活動に必要な経緯が説明できない。又、リスクアセスメントの進め方が説明できない。
評価項目4	標準的な到達レベルに加えて、以下のことができる。 1) 危険予知活動の手法で、「基礎4ラウンド法」を説明できる。 2) 危険予知訓練が目指すものが説明できる。		1) 危険予知訓練が、リスクアセスメントと関連した活動であることが説明できる。 2) 危険予知訓練の進め方が説明できる。		危険予知訓練の為のイラストを見て、考えられる危険がどんどん出てこない。又、リスクアセスメントとの関連を説明できない。
評価項目5	標準的な到達レベルに加えて、以下のことができる。 1) 労働安全衛生法と労働基準法の関連を説明できる。 2) 労働安全衛生規則は、新たに発生した労働災害に対応した追加の法が制定されていることを説明できる。 3) 労働基準法は、労働に関する規制等を定める日本の法律、労働組合法、労働関係調整法と共に、いわゆる労働三法の一つであることを説明できる。 4) 労働安全衛生マネジメントシステムの「点検と改善等」項目があり、改善活動のステップを説明できる。		1) 労働安全衛生法の目的及び概要が説明できる。 2) 労働安全衛生規則が、労働安全衛生法及び労働安全衛生法施行令の規定に基づき、並びに同法を実施するため、労働安全衛生規則が定めてあることが説明できる。 3) 労働基準法が賃金、労働契約、労働時間、休憩、休日及び年次有給休暇などの最低基準を定めた法であることを説明できる。 4) 労働安全衛生マネジメントシステムについて、システムの概要を説明できる。		安全衛生の安全とは、許容できないリスクがないこと。衛生とは、健康をまもる。を意味することが理解できない。又、労働基準法が労働者のための法律であることが理解できない。 労働安全衛生マネジメントシステムが、労働(職業)上の衛生(健康)の確保と安全の確保のための人・物・金・情報などの経営資源をやり繰り(manage)して、PDCAサイクルを回し効率的に効果を上げる仕組みであることを理解していない。

評価項目6	標準的な到達レベルに加えて、以下のことができる。 1) 衛生委員会、安全委員会の概要が説明できる。 2) 有害作業環境と健康障害の関係を説明できる。 3) 職業性疾病の予防の手段として「化管法SDS(安全データシート)」があるが、その概要を説明できる。 4) 作業環境管理の「管理」で、使われる「PDCAサイクル」の意味を説明できる。 5) 「熱中症」とは、暑い環境で生じる障害の総称で、熱失神・熱疲労・熱射病・熱けいれん・熱射病の病型ごとの症状を説明できる。	1) 衛生管理体制の役割が説明でき、同じような安全管理体制の役割についても説明ができる。 2) 作業環境要素の意味と有害作業環境要素にどんなものがあるかを説明できる。 3) 職業性疾病とは、どんな疾病かを説明できる。又、職業性疾病の原因を説明できる。 4) 作業環境管理とはどんな管理を行うことであるかを説明できる。 5) 労働安全衛生規則の「第9章 救急用具」の事業者が最低限備えなければならない救急用具及び材料を説明できる。	事業活動では、労働者の安全衛生を管理するための体制を定め、災害や職業性疾病が発生しないように、定期的に衛生委員会、安全委員会を定期的に開催して、規則や各種対策を決定し、社員教育等で周知していくことなどが、労働安全衛生法及び関連規則で決められているが、このような内容を理解していない。又、緊急時を想定しての訓練の実施や救急用具の備え付けが義務付けられていることが分からない。
評価項目7	標準的な到達レベルに加えて、以下のことができる。 製造物責任法（PL法）に関する報道がされているが、身近にある事例として、その内容を説明できる。	製造物責任法（PL法）の概要を説明できる。又、法にある「欠陥」について説明ができる。	物作り側にも問題が発生した場合には、損害賠償責任があることを認識していない。

学科の到達目標項目との関係

教育方法等

概要	技術者に必要な安全衛生について、安全衛生の目的・目標は何かを認識し、安全衛生の必要性、関連する法規制、作業環境及び食の安全を含む製品の安全性に関する諸問題等について理解する。各項目の目標を以下に示す。 1. 労働安全衛生法等で、事業者が行う安全配慮義務とは何かを説明できる。又、不安全行動・不安全状態及びフールプルーフ及びフェールセーフの意味を理解し、説明できる。 2. ハインリッヒの法則を説明できる。そして、ヒヤリハット活動との関係を説明できる。 3. リスクアセスメントの意義・進め方を説明できる。 4. 危険予知訓練の意義・進め方を説明できる。 5. 労働安全衛生法、労働安全衛生規則、労働基準法の目的及びその概要を説明できる。又、労働安全衛生マネジメントシステムの概要を説明できる。 6. 労働安全衛生法の安全衛生管理体制の内容を説明できる。又、作業環境管理と職業性疾病との関係を説明できる。 7. 製造物責任法(PL法)の説明ができる。
授業の進め方・方法	法の順守には、該当する法の内容を理解することがまず大事である。労働安全衛生法及び関連する法規制内容を理解し、事業者・労働者としてなすべきことを理解することが重要である。又、労働災害の発生を防止するためには、リスクアセスメント等の理解が重要である。授業ごとに必ず予習を行い、授業内容を確実に理解すること。
注意点	将来、衛生管理者1種および2種をはじめとする、労働安全コンサルタントや衛生コンサルタント等の資格試験に合格するために、参考書等で予習をし、授業時間での質問等に対応できるようにしていること。又、講義終了後は、復習として演習課題等の課題に取り組むこと。そして、労働災害に関する事故や商品・製造物に関する事故に関する記事について自分の考えをまとめておくこと。疑問点があれば、きちんと質問すること。

授業計画

		週	授業内容	週ごとの到達目標
前期	1stQ	1週	1. 安全衛生の基礎	☐ (1) 安全配慮義務について説明できる。 ☐ (2) 不安全な行動について説明できる。 ☐ (3) 不安全な状態について説明できる。 ☐ (4) フールプルーフについて説明できる。 ☐ (5) フェールセーフについて説明できる。
		2週	2. ヒヤリハット	☐ (1) ハインリッヒの法則について説明できる。 ☐ (2) ヒヤリハットの意義について説明できる。 ☐ (3) ヒヤリハットの進め方について説明できる。
		3週	3. リスクアセスメント	☐ (1) リスクアセスメントの意義について説明できる。 ☐ (2) リスクアセスメントの進め方について説明できる。
		4週	3. リスクアセスメント	☐ (1) リスクアセスメントの意義について説明できる。 ☐ (2) リスクアセスメントの進め方について説明できる。
		5週	4. 危険予知訓練（KYT）	☐ (1) 危険予知訓練（KYT）の意義について説明できる。 ☐ (2) 危険予知訓練（KYT）の進め方について説明できる。
		6週	4. 危険予知訓練（KYT）	☐ (1) 危険予知訓練（KYT）の意義について説明できる。 ☐ (2) 危険予知訓練（KYT）の進め方について説明できる。
		7週	5. 関係法令、労働安全衛生マネジメントシステム	☐ (1) 労働安全衛生法について説明できる。 ☐ (2) 労働安全衛生規則について説明できる。 ☐ (3) 労働基準法について説明できる。 ☐ (4) 労働安全衛生マネジメントシステムについて説明できる。

		8週	5. 関係法令、労働安全衛生マネジメントシステム	☐ (1) 労働安全衛生法について説明できる。 ☐ (2) 労働安全衛生規則について説明できる。 ☐ (3) 労働基準法について説明できる。 ☐ (4) 労働安全衛生マネジメントシステムについて説明できる。
	2ndQ	9週	5. 関係法令、労働安全衛生マネジメントシステム	☐ (1) 労働安全衛生法について説明できる。 ☐ (2) 労働安全衛生規則について説明できる。 ☐ (3) 労働基準法について説明できる。 ☐ (4) 労働安全衛生マネジメントシステムについて説明できる。
		10週	5. 関係法令、労働安全衛生マネジメントシステム	☐ (1) 労働安全衛生法について説明できる。 ☐ (2) 労働安全衛生規則について説明できる。 ☐ (3) 労働基準法について説明できる。 ☐ (4) 労働安全衛生マネジメントシステムについて説明できる。
		11週	6. 労働衛生	☐ (1) 衛生管理体制について説明できる。 ☐ (2) 作業環境要素について説明できる。 ☐ (3) 職業性疾病について説明できる。 ☐ (4) 作業環境管理について説明できる。 ☐ (5) 救急処置について説明できる。
		12週	6. 労働衛生	☐ (1) 衛生管理体制について説明できる。 ☐ (2) 作業環境要素について説明できる。 ☐ (3) 職業性疾病について説明できる。 ☐ (4) 作業環境管理について説明できる。 ☐ (5) 救急処置について説明できる。
		13週	6. 労働衛生	☐ (1) 衛生管理体制について説明できる。 ☐ (2) 作業環境要素について説明できる。 ☐ (3) 職業性疾病について説明できる。 ☐ (4) 作業環境管理について説明できる。 ☐ (5) 救急処置について説明できる。
		14週	7. 製造物責任法（PL法）	☐ 製造物責任法（P L 法）について説明できる。
		15週	試験答案の返却・解説	授業項目1～7に対して達成度を確認する。 試験において間違えた部分を自分の課題として把握する。
		16週		

評価割合

	試験	発表	相互評価	態度	ポートフォリオ	その他	合計
総合評価割合	70	0	0	0	0	30	100
基礎的能力	0	0	0	0	0	0	0
専門的能力	70	0	0	0	0	30	100
分野横断的能力	0	0	0	0	0	0	0

鹿児島工業高等専門学校		開講年度	平成29年度 (2017年度)		授業科目	超伝導工学	
科目基礎情報							
科目番号	0040			科目区分	専門 / 選択		
授業形態	講義			単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	電気情報システム工学専攻			対象学年	専2		
開設期	後期			週時間数	2		
教科書/教材	なし（必要に応じて、プリントを配布）						
担当教員	奥 高洋						
到達目標							
先端技術の一つである超伝導を例に、その基本から応用までを幅広く学ぶ。機能/材料開発における基礎の重要性を理解した上で、応用に際してのユニークな発想力を養うことを目指す。具体的には、以下に掲げる4つを目標とする。 1. 超伝導現象について、各々説明できる。 2. 代表的な超伝導材料について分類でき、それらの特徴等を説明できる。 3. 強電分野における応用例を挙げて、その動作原理や実状・問題点等について説明できる。 4. 弱電分野における応用例を挙げて、その動作原理や実状・問題点等について説明できる。							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安			標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1	設定なし			超伝導の特徴的な現象について、各々説明できる。		超伝導の特徴的な現象について、各々説明できない。	
評価項目2	超伝導の特徴的な値（ λ , ξ , κ ほか）について説明でき、数式を用いた理論的取扱いができる。			代表的な超伝導材料について分類できる。また、第1種超伝導体と第2種超伝導体についても説明できる。		代表的な超伝導材料について分類できない。また、第1種超伝導体と第2種超伝導体についても説明できない。	
評価項目3	強電分野での応用例において、実状・問題点等を踏まえて、何らかの解決案を提示できる。			強電分野における応用例を挙げて、その動作原理について説明できる。		強電分野における応用例を挙げて、その動作原理について説明できない。	
評価項目4	弱電分野での応用例において、実状・問題点等を踏まえて、何らかの解決案を提示できる。			弱電分野における応用例を挙げて、その動作原理について説明できる。		強電分野における応用例を挙げて、その動作原理について説明できない。	
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	様々な専門分野の境界に位置する超伝導を例に学ぶことで、各専攻科生の専門分野と先端技術の関わりを認識するとともに、創造力に富んだ技術者としての素養を養う。						
授業の進め方・方法	講義形式を基本とする。全専攻共通科目ではあるが、数学、電磁気学、物性学等の基礎学力を必要とする。						
注意点	授業項目に関連する内容については予習 / 復習が必要である。加えて適宜レポート等を課すので、毎回210分以上の自学自習を行わなければならない。						
授業計画							
		週	授業内容			週ごとの到達目標	
後期	3rdQ	1週	超伝導現象①			超伝導の特徴的な現象について、各々説明できる。	
		2週	超伝導現象②			超伝導の特徴的な現象について、各々説明できる。	
		3週	超伝導現象③			超伝導の特徴的な現象について、各々説明できる。	
		4週	超伝導材料①			代表的な超伝導材料について分類でき、それらの特徴等を説明できる。	
		5週	超伝導材料②			第1種超伝導体と第2種超伝導体について理解し、混合状態や渦糸および磁束フローについて説明できる。	
		6週	超伝導材料③			超伝導現象利用時における冷却技術について説明できる	
		7週	強電分野への応用①			強電分野における応用例を挙げて、その動作原理や実状・問題点等について説明できる。	
		8週	強電分野への応用②			強電分野における応用例を挙げて、その動作原理や実状・問題点等について説明できる。	
	4thQ	9週	強電分野への応用③			強電分野における応用例を挙げて、その動作原理や実状・問題点等について説明できる。	
		10週	強電分野への応用④			強電分野における応用例を挙げて、その動作原理や実状・問題点等について説明できる。	
		11週	弱電分野への応用①			弱電分野における応用例を挙げて、その動作原理や実状・問題点等について説明できる	
		12週	弱電分野への応用②			弱電分野における応用例を挙げて、その動作原理や実状・問題点等について説明できる	
		13週	弱電分野への応用③			弱電分野における応用例を挙げて、その動作原理や実状・問題点等について説明できる	
		14週	弱電分野への応用④			弱電分野における応用例を挙げて、その動作原理や実状・問題点等について説明できる	
		15週	定期試験 試験答案の返却・解説			授業内容に対して達成度を確認する。 試験において間違った部分を自分の課題として把握する（非評価項目）。	
		16週					
評価割合							
		試験		レポート		合計	
総合評価割合		60		40		100	
基礎的能力		0		0		0	
専門的能力		60		40		100	

分野横断的能力	0	0	0
---------	---	---	---

鹿児島工業高等専門学校		開講年度	平成29年度 (2017年度)		授業科目	ヒューマンインターフェース	
科目基礎情報							
科目番号	0041			科目区分	専門 / 選択		
授業形態	講義			単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	電気情報システム工学専攻			対象学年	専2		
開設期	前期			週時間数	2		
教科書/教材	なし						
担当教員	新徳 健						
到達目標							
ヒューマンインタフェースの考え方の基礎について理解する。ヒューマンインタフェースは人と機器、あるいは情報機器を介した人と人との関わりを支援する技術に関する学問である。							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安			標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1	ヒューマンインタフェースの主要な目的と定義について説明できる。			ヒューマンインタフェースの定義を説明できる。		ヒューマンインタフェースの定義を説明できない。	
評価項目2	人間特性である身体特性、生理特性、認知特性、感性について説明できる。			人間特性4つのうち、少なくとも2つについて説明できる。		人間特性4つのうち、少なくとも2つについて説明できない。	
評価項目3	ヒューマンエラーの発生要因と防止対策について説明できる。			ヒューマンエラーの定義を説明できる。		ヒューマンエラーの定義を説明できない。	
評価項目4	入出力インタフェースとインタラクションスタイルについて説明できる。			入出力インタフェースについて説明できる。		入出力インタフェースについて説明できない。	
評価項目5	ユーザビリティ、HIの原理とデザイン原則、ガイドライン、デザインプロセスと評価方法について説明できる。			ユーザビリティ、HIの原理とデザイン原則、ガイドラインについて説明できる。		ユーザビリティ、HIの原理とデザイン原則、ガイドラインについて説明できない。	
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	ヒューマンインタフェースは工学だけでなく、その他の広い分野に関連のある学問である。柔軟な発想力を持って臨むことが必要とされる。						
授業の進め方・方法	講義の内容をよく理解するために、毎回、配布プリント等を参考に、60分以上の自学自習が必要である。						
注意点	疑問点があれば、その都度質問すること。						
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
前期	1stQ	1週	ヒューマンインタフェースの概要		ヒューマンインタフェースの原理と定義について説明できる。		
		2週	人間の特性とヒューマンインタフェース		人の身体特性、生理特性、認知特性と感性について説明できる。		
		3週	人間の特性とヒューマンインタフェース				
		4週	人間の特性とヒューマンインタフェース				
		5週	人間の特性とヒューマンインタフェース				
		6週	インタフェースの認知システム		ヒューマンモデル、ヒューマンエラーの分類とエラー解析について説明できる。		
		7週	入出力インタフェース		入出力機器とのインタラクションについて説明できる。		
		8週	入出力インタフェース				
	2ndQ	9週	入出力インタフェース				
		10週	インタフェース行動の心理・生理		人の心理行動に関わる生理学的知識について説明できる。		
		11週	インタフェース行動の心理・生理				
		12週	インタフェースのデザインと評価		インタフェースデザインの指針、デザイン手法、評価手法について説明できる。		
		13週	インタフェースのデザインと評価				
		14週	インタフェースのデザインと評価				
		15週	定期試験		授業項目について達成度を確認する。		
		16週					
評価割合							
	試験		発表等		合計		
総合評価割合	80		20		100		
専門的能力	80		20		100		